国際文化学部　カリキュラムマップ

2024年4月版

◆　下記のカリキュラムマップは、学部のそれぞれの科目の到達目標と概要を示し、下記の本学部ディプロマ・ポリシー（DP）4項目とどのように関係しているか示したものです。

◆　表の上で、◎：科目と強く関連するもの、　○：科目と関連するもの、△：科目とやや関連するもの、を指します。

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
入門科目			国際文化情報学入門	『国際文化情報学入門』は各コースの担当教員によるオムニバス講義です。今年度の担当は下記の4名です。 情報文化：和泉順子 表象文化：Letizia GUARINI（レティツィア・グアリーニ） 言語文化：廣松勲 国際社会：大中一彌 国際文化学部の学生として身につけてもらいたい基本的な知識を捉え、学生各自が在学中に共通に必要となる「文化を学ぶ考え方」を理解するための講義です。私たちの学部では文化を『情報文化』『表象文化』『言語文化』『国際社会』の4つの面から捉えようとしており、それぞれの分野を専門とする4人の教員が担当します。 さらに，本科目では，大学で必要とされるアカデミック・スキルズや研究倫理についても学びます．	「情報文化」は、現代の都市型社会において「情報」こそが我々の思考や生活の基盤であるとの立場から、情報の生成、編集、再構成と文化の伝達や人間と情報のかかわりについて学びます。特に、デジタル空間で得られる情報の特性を知ると同時に、それらを素材として自ら思考し経験することの意味を考えられるようになるのが目標です。 「表象文化」は、主に人間の知覚と創造行為の関連、創造行為のプロセスとメディアの関連を学びながら、幅広い知の視点の獲得を目指すとともに、研究対象とその方法を選ぶための初歩的な議論を導入します。「表象文化＝芸術に関する知識のインプットではない」こと、創造行為と日常の間にあるもの、表象文化と社会の結びつきについて、思考できるようになるのが目標です。 「言語文化」では，国際文化学部生として知っておいて欲しい言語に関する基本的な知識や外国語学習のコツを，文学研究を土台にしながら考えていきます．同時に，基本的なレファレンス類の使い方，大学での外国語の学び方，日々の情報収集の方法等についても触れます．併せて，可能な限り、他の3分野とのインターフェースについても検討します． 「国際社会」では、現代の世界における国家間・集団間の諸問題を文化的な視野のなかで考える態度と方法を学びます。簡単な単語を使い、外国語を積極的に話そうとする姿勢は大切ですが、話をする時の中身はよりいっそう大切です。この「入門」授業では、高校までの知識を確認しながら、国際問題について考え、語るための糸口を見つけることが目標となります。	◎	◎	◎	◎
基幹科目	基幹共通		国際文化情報学の展開	本科目は、1年次の「国際文化情報学入門」に続くものとして開設されたものである（ただし必修ではない）。本学部の4つの科目群「情報文化・表象文化・言語文化・国際社会」の垣根を超えた共通テーマのもとで、ゲスト講師を含む複数教員によるオムニバス授業を行い、学際的かつ分野横断的な知識を身につける。今年度のテーマは「デジタル化する社会・人間とコミュニケーション」。今年度のコーディネーターは国際文化学部教員の林志津江が担当する。	1．本学部の四つの柱「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」にまたがった、学際的な視座を得ることができるようになる。 2．SA、SJ、ゼミ活動、卒業論文・卒業制作などで必要となる国際文化情報学のより発展的な知識や考え方を身につける。 3．諸問題により異文化交流が困難な状況であっても、国際文化情報学（intercultural communication）を多角的に捉えることによって、国際文化学部の学びの意義を改めて考え直し説明できるようになる。		◎	◎	
基幹科目	情報文化系		ディジタル情報学概論	ITを過大評価しても過小評価してもいけない。ムードに流されることなく、正しく理解することが重要である。 ディジタル情報化社会、それを支えるディジタル技術全体を広く正しく理解するために、文科系の学生、情報学に関心を持つ人を対象に、広い視野のもとにITの本質を明確にし、わかりやすく述べる。 この科目は本学部で展開する情報科目ならびに情報デザイン・メディア表現科目群の関連専攻科目の根幹であり、受講者が現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得ることを目指す。 情報学と聞くと数学の知識などが必要な難解なものであるというイメージがあるかもしれないが、本講義では複雑な数学の知識などがなくても理解できるようにわかりやすく説明する予定であるので、コンピュータや情報学に興味がある方は積極的に受講してほしい。	ディジタルとは何かについて理解する。 ディジタル情報を用いた様々な要素技術について理解する。 ディジタル情報化社会及び、それを支えるディジタル技術全体を広く正しく理解する。 現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得る。				◎
基幹科目	情報文化系		統計処理法	みなさんは、新聞、テレビ、インターネットなどを通してデータに日々接しています。これらの、大量で多様なデータの中から、必要なものを情報として抽出し、適切な解釈を与えることはけっして容易なことではありません。 統計学はデータを数値化し、客観的に分析・評価することで、本質を捉えようとするための方法論です。この科目ではそのような統計学の基本的な考え方について学んでいきます。 また、自然言語処理技術の研究開発の実務に携わっている講師が、現在ブームとなっている生成AIに使われている確率統計の考え方を紹介したいと思います。	・データの可視化（グラフ化）の方法を身につける ・データを解釈する方法を身につける ・基本統計量（平均、分散、相関等）の算出方法を理解する ・確率の計算方法を理解し、具体的な計算を実施できる ・確率分布の概念と、その実世界への応用の方法を理解する		△	○	◎

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
基幹科目	情報文化系		システム論	●　あなたの身近な『システム』たち コンピュータやSNSばかりがシステムではない。私たちの生活はたくさんの『システム』に囲まれている。電子マネーやオンラインショップがシステムという説明は頷けるとしても、家族や社会、国際食糧支援、チームスポーツ、コンビニもシステム、と云われたらどうだろうか。 ●『家族』もシステム？ 暮らしや社会の意外な仕組みが、広い意味でのシステムとして、私たちの文化の中に様々な形態で組み込まれている。交通にしても、家族にしても、多国間関係にしても、うまく機能している間は人々は気づかない。その仕組みがシステムとしてうまくはたらかなくなった時に問題は顕在化する。 ●「システムという考え方」を学ぶ 本講義を通じて、最初は複雑すぎて捉えられない事柄も、「システムという考え方」を用いて整理し、自分で系統立てて捉えることができるようになる。 システムとは何か。文化の中の様々な物事をシステムとして捉えることによって、考え方が変わる。 本講義では、暮らしの中の身近な例や、システムとして意識したことがない意外な例を取り上げながら、それがどのような意味でシステムなのか、解きほぐしていく。複雑な事柄も複数の構成要素が巧みに関係し合った現象として、理解が進む。対象の本質を浮かび上がらせ、改善策の考案へとつなげる。これを練習する。 ●　システムから世の中を見ると、いろいろな事が見えてくる 人が作ったモノだけでなく、『家族』や『社会』も一種のシステムである。 たとえば『家族』とは何か、家族が家族でいようとする目的は何か、なぜ現在の形態になっているのか、一度は考えたことがあるかもしれない。あるいは、差別や階層など、他と区別するための概念が新たに生まれたり、消滅すると何が変わるのか。システムとして捉え直すと、それが社会の営みに対する questions を整理し、明確化することにもつながる。 社会にはさまざまな形でシステムが埋め込まれている。その様態は常に変化している。そして、そこにはシステムとしての役割の変化がある。それらを発見する作業は面白い。なぜならその変化は、人間が暮らし方を変革してきた足跡そのものだから。	・まずシステムの基本的な考え方を学び、要点を理解できるようになる。 ・次に、簡単な事例であれば、「システムの考え方」を用いて、問題を解きほぐしながら複数の視点から分析し、自分なりの答えを「系統立てて」導く方法を組み立てられるようになる。 ・本講義を終える頃には、社会の、またはあなたが着目する一見複雑に見える問題に対し、その問題を捉えやすく整理し直し、システムの考え方を用いて、自分なりの答えを系統立てて考えられるようになる、ことを目指す。	△	◎	◎	◎
基幹科目	情報文化系		文化情報学概論	【授業の概要と目的（何を学ぶか）】/ Outline and Objectives 現代の情報社会では、物だけでなく知識や情報そのものが価値をもち、この傾向はデジタル化した社会やインターネットの普及などでますます増大している。それにともない、現実世界だけでなく、デジタルワールドやインターネット上での情報の取り扱いは、「情報倫理」（information ethics）や「パブリック・リレーションズ」（主体と公衆の理想的な関係構築）の問題としても認知されている。 本授業では、ポピュラー音楽や映画など、主に20世紀以降のサブカルチャーにおける作品やアーティストとその背景などを解説しつつ、それに関連した「情報倫理」や「パブリック・リレーションズ」の基本的な考え方について学び、ディスカッションやディベートなども行う。 【授業の意義】 音楽や映画、演劇やダンス、美術や写真、果ては文学など、ほぼすべてのアートアンドカルチャーが、"文化情報"として生産され、流通し、消費されている現代社会。さらに、インターネット・メディアの発達で、芸術文化を取り巻く環境に大きな変化が生じてもいる。複製や流通が飛躍的に容易になった今、いかなる「情報倫理」が求められているのか。また、いかなる「パブリック・リレーションズ」の構築が可能なのか？プライバシー侵害や著作権処理の問題、相互監視社会の強靭化などに晒される昨今、サブカルチャーの具体例を学びながら、同時に、問題解決に必要な「情報倫理」や「メディア・リテラシー」「パブリック・リレーションズ」についての基礎的な考え方を身につける。	(1)　主に1960年代以降のサブカルチャーにおける具体的事例を取り上げながら、21世紀の現在に至るまでの歴史的トピックスを検証し、それらの「情報倫理」の在り方を学習する。 (2)「情報倫理」と「パブリック・リレーションズ」の構築について具体的事例と共に考え、視覚文化や聴覚文化を含む情報文化領域への新しいアプローチの糸口を発見する。 (3)　身近にあるサブカルチャーの歴史の一端を一般教養として身につけ、それらの社会や個々の価値観への影響やその未来について研究する。		◎	◎	◎
基幹科目	情報文化系		情報産業論	【授業の概要】 現代生活において、情報産業やメディア産業は非常に重要な役割を担っている。また情報産業は、高度に技術革新することにより、常に変化し続けている。これらの構造や課題、将来を理解することは、消費者やビジネスマンとして、技術や市場トレンドの動向に対応して、より良い判断をするために重要である。本講座では、メディアを中心とする情報産業における産業構造、ビジネスモデル、問題点、未来の展望などを理解することを目指す。授業の中では、業界トレンド、テクノロジーの進化、市場動向、企業戦略などについて学習することができる。 【授業の目的（何を学ぶか）】 1.メディア産業の変遷と現状: 過去から現在までのメディア産業の変遷を追い、現在のメディア産業の状況を理解する。 2.メディア技術の変革: 情報技術の進歩によって、メディア産業にもたらされた影響と、それによって変革されたメディア技術、その光と影について理解する。 3.メディアビジネスモデル: 新たなメディア技術に伴い、メディアビジネスモデルが変革していることを理解する。また、有料・無料・広告収入などのメディアビジネスモデルの種類と特徴について学ぶ。 4.メディア業界のグローバル化: メディア産業はグローバルな市場を持つようになっており、欧米におけるメディア産業の状況と、国内市場に与える影響、各国間でのメディアの共有・流通に関連する課題について理解する。	下記の各項目についてデジタル技術がもたらしたメディア産業全体への変化を理解する － 4K/8K、HDR、VoIP、クラウド・プロダクションなどの放送を変革する技術動向への理解 － CES、MWC、NAB、IBCなどの海外見本市からメディア関連産業がどのように変容しようとしているのかについての理解 － OTT、SVOD、AVOD、FAST、D2Cなどの新しいメディアビジネスモデルの理解 － NetflixやDisney+などの欧米のメジャープレイヤーとTVerやAbemaなど国内の事業者の現状への理解 － IoT、生成AIなどの技術が自動運転、スマートシティ等のメディア産業以外の業界に与える影響についての理解 － インターネットによるメディア産業への負の影響としての違法配信とその対策についての理解 － 地球温暖化対策が求められる中でのメディア産業の対応の状況と将来の課題への理解 － 放送事業者にとってのdigital-firstとは何か、放送の将来像への理解		◎	◎	◎
基幹科目	情報文化系		ネット文化論	インターネットがスマートフォン等のデバイスとともに発展し、我々の生活スタイルは大きく変化しています。このような社会を「ネット社会」と呼びます。ネット社会の特性とその本質を理解することは、現代社会の動向に対して主体的に活動するために重要です。 本講義では通信ネットワークやコンピュータスマートフォンを基盤とするインターネットの仕組みや歴史、その特性について扱います。また、ネット社会における、価値観、経済活動、合意形成、それを支える情報システムの重要性、知的財産権、プライバシー、倫理、技術について講義します。こうした内容を理解し、ネット社会を構築する文化についての多面的な思考を深めていきたいと思います。 本講義が対象とする領域は、極めて変化が激しいものです。社会的・技術的な課題も日々発生します。こうした課題に対する正解は必ずしも存在するわけではありません。したがって本講義は単なる知識の獲得のみを目的としません。社会で生じている事象の本質を捉え、自らの視点で解釈し、日常活動に対する思慮を深めることを主な目的とします。	日々変化をするネット社会のなかで合理的な行動を行うために、自らにとって重要な情報の選択基準を持続的に構築する考え方の習得を目標とします。また、講義で扱われるネット社会の事例に対し、受講者自らの意見を論理的に説明することや課題を設定し解決案を検討することも目標とします。		○	◎	◎

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
基幹科目	表象文化系		表象文化概論	「表象文化」とは人間が様々なメディアや方法によって創造する行為、またその行為を通じて生み出されたものを指します。各講義では、演劇、音楽、非言語的コミュニケーション、建築などの領域を扱いますが、特定の分野にとらわれず芸術や文化、社会について横断的に検証していきます。それらの表現手法、歴史的変遷などを辿りながら、内包している意味、欲望、人々に与える影響などを解き明かしてゆくことを目指すのが「表象文化概論」です。 4人の教員による4分野の表象を扱いつつ、表象文化論の基本について学ぶことを目的とします。	この講義は、入門科目「国際文化情報学入門・表象文化コース」からつながる学びのプロセスとなります。この講義を通じて表象文化に関する多様な考え方を理解し、各専門科目でさらに踏み込んだ研究を継続することが望ましいと考えます。各講義を通じて各自の関心のある領域で今後の専門研究が進められるように導きます。		◎	○	△
基幹科目	表象文化系		メディアと情報	現代社会におけるコミュニケーションを成り立たせるメディアと情報の特性とはたらきをさまざまな分野の考察を通して理解し、生活者として、また社会や市場への幅広い発信に携わる職業人として、メディアに対する姿勢とその活用の基礎を習得する。	以下3点を目標とする。 1)身の回りで起こるメディアを介したコミュニケーションのメカニズム、メディアのはたらきを自覚する。 2)環境の監視、事業や制度の運営、文化の共有など、社会においてさまざまな目的のために行われるメディア・コミュニケーションの必要性と問題性の両面を学習する。 3)メディア・リテラシーの視点を身につけ、メディアと情報のもたらす現象について客観的な評価を行えるようにする。あわせて、あらゆる社会的活動に不可欠となる他者からの理解と支持を得るための情報発信（PR＝パブリック・リレーション）の視点を持てるようにする。		◎	◎	◎
基幹科目	表象文化系		社会と美術	国際文化学部基幹科目「社会と美術」は、普段接する機会の少ない、先進的な表現領域に対する理解を深めるための入門的な授業です。この講義では、特に21世紀以降に関心を集めている社会と芸術との関係に焦点を当て、パフォーミング・アーツ、音楽、建築などの表象の世界の様々な事例を参照し、社会と芸術の接点や関係性について探求します。 本授業は、「近現代美術の歴史と理論」と「現代社会の課題と美術」という2つのテーマで構成されており、各領域のキーワードからそれぞれの課題や問題を検討、議論します。 第一部 「近現代の芸術史と理論」では、18世紀以降から21世紀までの美術史と理論を包括的に学び、芸術表現の変遷とその背後にある思想や理論を探求します。 第二部 「現代社会の課題と美術」では、社会や時代を映す鏡としての芸術表現と現代社会との関係について具体例を交えながら学びます。21世紀以降に注目されている社会と芸術との関係を扱ったアートの世界に焦点を当てていきます。	近現代の美術史と現代社会と美術に関する課題の事例を紹介していきます。近現代美術史の基本を理解すること、各時代の社会的課題と芸術との関連を見いだすことがこの講義の目標となります。	△	◎	◎	◎
基幹科目	表象文化系		メディアと社会	私たちは現在様々なメディアに接する環境にあり、それらを通じて個人や社会とつながることを可能にしています。一方でメディアの利用によって引き起こされる様々な問題もあり、多様化した現代のメディアについてよりいっそう理解を深める必要があります。 国際文化学部基幹科目「メディアと社会」では、メディアが社会のなかでどのような役割を担っているのか、将来メディアはどのようになるべきなのか、映像資料などの具体例を交えて読み解いていきます。 「現代メディア史」「メディア論」「メディアと表象」の3つのテーマを軸として、各領域のキーワードからそれぞれの課題や問題を検討、議論します。 メディアの歴史 古代から現代までのメディアの変遷と歴史について学びます。 メディア論 社会の中で機能するメディアやその問題点について明らかにしていきます。 メディアと表象 メディアという観点から様々な表現を読み解いていきます。	過去から現在に至るメディアと社会に関する身近な事例を紹介していきます。身近な問題から普遍的、社会的な課題を見いだすことがこの講義の目標となります。	△	◎	◎	◎
基幹科目	表象文化系		身体表象論	視覚芸術・文化に表現された身体を手がかりに、身体を見る／見せるとはどういうことかについて学ぶ。身体と社会の境界が歴史的・文化的に規定されていることを確認し、人間の身体を社会的にどのように位置付ければよいのか、受講生が自分なりの考えを構築できるようにする。	・芸術、文化における身体運動の表象形式を理解することができる。 ・身体表象の特徴を、歴史的、社会的に位置付けることができる。 ・作品に表現された身体に関する自分なりの見方を構築し、作品を批評・分析・記述することができる。		◎	○	
基幹科目	表象文化系		現代思想	本授業は「現代思想（contemporary thought）」という科目名がついているが、ただ単に「現代の流行の思想」を学ぶだけが目的ではない。私たちが生きている「同時代（contemporary）」で起こる出来事や物事の、「起源」や「本質」について「哲学的に考えること（philosophical thinking）」が「現代思想」という科目の目的である。 私たちの生きている世界は、多様な価値観、多様な文化、多様なアイデンティティ、多様な「意見」によって構成されている。多様さは、一方で人間存在の豊かな可能性の現れであるが、他方で異なる価値観の間で摩擦を生じさせ、誤解と対立を招く原因でもある。 こうした人間の多様さについて思索をしたのが、20世紀を代表する政治哲学者の一人であるハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906-1975）である。本授業は、アーレントの『人間の条件』（1958）を基本的なテキストとして、「異質な他者と共に生きること」の意味について考える。 アーレントによれば、多様な人々の間で構成される公的空間は、自分とは異なる他者の立場について自分自身の頭で考える「想像力」（imagination）の働きによって構成されている。 なぜアーレントは、想像力と公的空間の重要性を主張したのだろうか。それは、「誰もが公の場所に姿を現し、声を発すること」ができなくなったとき、どれだけ悲惨で、非人間的な事態が起こるのかを、自身の体験とともに知っていたからである。その最も象徴的な事例は、20世紀のナチスドイツ政権下で行われた大量虐殺であり、絶滅収容所であった。 本授業では、政治的な想像力が、私たちの「生」にとってどのような意味をもっているのかを考えていく。アーレントのテキストを読み解くことによって、受講者一人ひとりが自分自身の問題に引きつけて思考する力を磨くことが授業の目的である。	(1)「哲学的に考えること（philosophical thinking）」ができようになる。 (2)本当の「哲学の問い」を探り、その問いに答える努力のなかで、生き方をもう一度捉え直し、自分が何をなすべきかを、ひとり一人考える力を身につけていくことができるようになる。		◎	◎	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
基幹科目	言語文化系		言語文化概論	この授業では、20世紀以降さまざまな領域で展開された、言語（ことば）を手がかりとして文化や社会、そこに生きる人間のあり方を捉え直そうとした学問的営み（理論・概念）について学び、現代に生きる私たちが世界をどう見つめ、向き合うかを考えます。	1)テキスト・資料の誠実な読みにもとづいて、思想家たちの思想的背景や問題意識を捉え、その理論と基本概念を理解する。 2)言語（ことば）と文化・社会との密接なかかわりについて「意味」「身体」「権力」「テクノロジー」などといった観点から検討し、理解を深める。 3)学んだ理論を手がかりに、現代社会とそこに生きる自らのあり方についての問題意識をはぐくみ、自らのことばで表現・伝達する。	○	◎	○	
基幹科目	言語文化系		比較文化	ポストコロニアリズム、オリエンタリズム、ジェンダー論、構造主義、文化人類学などの「理論」にも目くばせをしながら、比較文学・比較文化に必要な基礎を学ぶとともに、それらの理論を文学や映像作品など実際の芸術作品の比較分析に応用していきます。	文化を比較するにあたって、単なる相違の指摘に留まらず、より深い社会的・文化的な背景の考察へと思考を深めていくときに役にたつのが、様々な「理論」です。この授業では、文化について考えるにあたって我々を助けてくれるいくつかの理論をとりあげ、具体的な作品分析への応用を通じてその理解を深めます。 授業での学びを通じて、学生は、ジャンル・時代・言語等を異にする文化の作品間の比較文化的な分析ができるようになるとともに、様々な「理論」を理解し、作品分析に応用できるようになることを目指します。 また「理論」は必ずしも文化を理解するのに万能ではありません。「理論」の限界とそれ以外の文化研究の手法についても学びます。	○	◎	◎	
基幹科目	言語文化系		ジェンダー論	多様性に富むグローバルな文化・社会を理解する上で、ジェンダーは重要な視点の一つです。この授業では、文化的・社会的な性の有り様としてのジェンダーが、歴史的にどのように構築されまた変化してきたかを、言説という概念を軸に考えていきます。そこから、自文化ならびに異文化について、ジェンダーの視点を通じて、より多角的な分析と理解ができるようになることを目指します。	1. ジェンダー研究における基礎的概念を理解できるようになる。 2. 言説分析の基本的な方法論を習得し、ジェンダーに関連する諸問題について、基礎的な言説分析ができるようになる。		◎	○	
基幹科目	言語文化系		異文化間コミュニケーション	文化背景の異なる個人同士が出会い，互いに理解しあえる関係を築くというのは，人や情報の往来が加速度的に増す今日，もはや特別なことではない。 異文化者が出会ったとき、それぞれの背景の文化が異なることが原因でどういうことが起こってくるのか。最悪のコミュニケーション・ブレイクに陥らないためには，どのような知識や心構えが必要だろうか。実例に基づくケーススタディを通して，この問いをコミュニケーションの観点から考えていく。	1. コミュニケーション分野の主要な理論や概念を学び、文化が私たちのコミュニケーションに及ぼす影響について理解を深める 2. 実際の異文化接触場面で活用していけるような知識を修得する。 3. 多角的な視点を獲得し，「相手」とのインターアクションを通じて関係を改善する能力を養う		◎	◎	
基幹科目	言語文化系		Philosophy of the Public Sphere	People often think that “philosophy” is quite an old subject － and very difficult, unfortunately. It is true that philosophical questions have been discussed in rather complicated and often confusing manners since many years ago, for example, by Socrates and Aristotle in the ancient Greek period. But many philosophers did and do believe that these questions are closely related to our everyday life. That is, we are surrounded by many philosophical issues, although we may not always be aware of their philosophical significance. Philosophical issues are thus basically our everyday issues. But how are they related to our life? In this course, you will discuss various philosophical topics, their in-depth meanings, and their philosophical significance, attempting to find their very relevance to your life. I hope that under the new perspective gained in this course, you will be able to see your surroundings, your society, and the world in quite exciting and interesting manners. Out of many philosophical topics found in our daily life, we will pick and discuss 13 topics in class.	This course provides a broad introduction to philosophical ways of thinking. The course is open to students from any disciplines, who hope to: (1) understand some of the most fundamental philosophical topics (for instance: freedom, truth, and moral rightness /wrongness), (2) be able to explain the issues in very simple everyday terms, and (3) apply philosophical ways of thinking (reasoning) on every-day issues.	◎	◎	◎	△
基幹科目	国際社会系		国際関係学概論Ⅰ	「国際」を掲げた学部や講義は多様にあり、国境を越えた動きにはGlobal、Transnational、Internationalなどの表現もあります。これらの違いは何でしょうか。「国際関係」とは何であり、どのように研究されてきた/するのでしょうか。この問いを念頭に置きながら、「国際関係」が人（及びその集団）のいかなる“つながり”によって形成、展開してきた/いるか、と同時に、その「国際関係」がどう認識、分析されてきた/いるかを理解することで、国際関係学の視点と方法論を学び、現代世界に対する理解や諸課題へのアプローチ、国際文化情報学の学びにつなげます。 対象時期は近代国際関係の成立から第一次世界大戦までとし、「国際関係学概論Ⅱ」の前提となる内容となります。	1. 国際関係の構造と動態、これを分析するうえで用いられる概念や理論について基礎的な知識をもつことができる。 2. 現代国際関係の事象、問題が、複雑に絡み合った要素からできていることを認識し、しかし複雑だと等閑視するのではなく、それらが生み出された歴史的過程（通時的な視点）、同時代に起きているほかの問題や事象との関係性（共時的な視点。学際的な捉え方）から分析できる。 3. 上記を踏まえ、国際関係学の方法論、国際関係に関する諸情報を批判的に考察する視点を習得し、今日生起する事象、問題について自身の意見、解決への手がかりや手立てを示すことができる。	○	◎	◎	
基幹科目	国際社会系		国際関係学概論Ⅱ	「国際」を掲げた学部や講義は多様にあり、国境を越えた動きにはGlobal、Transnational、Internationalなどの表現もあります。これらの違いは何でしょうか。「国際関係」とは何であり、どのように研究されてきた/するのでしょうか。この問いを念頭に置きながら、「国際関係」が人（及びその集団）のいかなる“つながり”によって形成、展開してきた/いるか、と同時に、国際関係学の視点と方法論を学び、現代世界に対する理解や諸課題へのアプローチ、国際文化情報学の学びにつなげます。 対象時期は第二次世界大戦から現在までとし、「国際関係学概論Ⅰ」の内容を前提に進めます。	1. 国際関係の構造と動態、これを分析するうえで用いられる概念や理論について基礎的な知識をもつことができる。 2. 現代国際関係の事象、問題が、複雑に絡み合った要素からできていることを認識し、しかし複雑だと等閑視するのではなく、それらが生み出された歴史的過程（通時的な視点、学際的な捉え方）、同時代に起きているほかの問題や事象との関係性（共時的な視点。学際的な捉え方）から分析できる。 3. 上記を踏まえ、国際関係学の方法論、国際関係に関する諸情報を批判的に考察する視点を習得し、今日生起する事象、問題について自身の意見、解決への手がかりや手立てを示すことができる。	○	◎	◎	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
基幹科目	国際社会系		国家と民族	日本人（あるいはご自身のルーツを踏まえて考えてみてください）とは何だろうか。今日、私たちはそれほど意識することなく、国家や民族の枠組みを受け入れているかもしれない。とはいえ、これらは近代西洋で発明された後、「普遍的」な枠組みとしてグローバルに浸透ないし強要されたものでもある。本授業では、日本を含むアジア太平洋地域の事例に基づき、主に国家と民族の枠組みが人びとの自己意識や社会関係をどのように変化させてきたのか考察する。	・人種、民族や国民、エスニシティ、ナショナリズムなどの概念内容およびそれらが歴史的に構築されてきた過程を習得する。 ・ものごとを相対的に捉えることによって得られる自己／他者の理解に関する洞察力を身に付ける。 ・アジア太平洋地域における脱植民地化過程を学ぶとともに、現代のナショナリズムの動向を理解する。		◎	○	
基幹科目	国際社会系		平和学	本授業では主に国際機構に着目して平和学を学ぶ。歴史、思想、組織、制度、文化などを通して平和や暴力について考え、国際社会コースの基幹科目として、各自がより深めたい専門領域を見つけるきっかけとなることを目指す。	(1)消極的平和、積極的平和、文化的平和の概念を使って実例を説明できる。 (2)国際機構の特徴と平和との関係を具体的に説明できる。 (3)基本的なアカデミックスキルと平和学で取り上げられる方法を理解し、実例に適用できる。	○	◎	◎	○
基幹科目	国際社会系		宗教と社会	異文化理解において、宗教は重要な要素の一つです。この授業では、宗教というレンズを通して、過去そして現在における社会の諸問題を検討していきます。宗教と社会の関係を、格差・開発・ジェンダー・ナショナリズム・国民国家・消費・紛争などの問題から捉えることで、グローバル化の進む現代社会における多様な価値観との共生のあり方について考えていきます。	1. 宗教と社会の関係を考えるために必要な、基本的な概念や理論を理解できるようになる。 2. 宗教と社会の関係について、基本的な分析概念や理論を用いて、基礎的な事例分析ができるようになる。		◎	○	
基幹科目	国際社会系		Religion and Society	This course is designed to provide students with a comprehensive exploration of the complex intersections between society and religion in the context of a globalizing world. As globalization continues to shape and redefine human interactions, this course seeks to critically analyze the multifaceted roles that religion plays in influencing and responding to global dynamics. Students will explore issues such as immigration, nationalism, conflict, gender, sexuality, tourism, consumerism, and citizenship, all within the broader context of contemporary global society.	By the end of this course, ① Students will have gained a nuanced understanding of the intricate connections between society and religion in the age of globalization, enabling them to critically engage with the complex issues that arise in our increasingly interconnected world. ② Through a multidisciplinary approach, students will be equipped with the knowledge and analytical tools to address the challenges and opportunities presented by the dynamic interplay of society, religion, and globalization.	◎	◎	○	
基幹科目	国際社会系		国際文化協力	この授業では国際文化論の観点から国際協力の基礎を学ぶものである。具体的には国際協力の歴史や仕組み、国際協力が文化に及ぼす影響、文化面の国際協力のあり方について知識を習得するとともに、それらを用いて論理的に考える力を養うことを目的とする。基幹科目なので、1、2年生には、専攻科目や演習で更に深めたい学問領域やテーマを見つける機会にして欲しい。	(1)国際文化論および国際協力についての基礎的な知識を身につける。 (2)国際協力と文化を結びつけて論理的に事象を分析できる。 (3)「技術と文化」「開発コミュニケーション」「文化遺産保護」「難民」「パブリックディプロマシー」などに授業で扱うテーマついて説明できる。 (4)基幹科目としてアカデミックスキルを身につける。	○	◎	◎	○
基幹科目	国際社会系		異文化適応論	国際社会で生きるとき、われわれは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えるとき、われわれは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考える傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。本講義では、文化心理学における比較文化的実証研究を取り上げながら、心の働きと文化の関連性について学んでいくとともに、世界という視点で捉えたとき、われわれが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを学んでいく。また、講義で扱う様々なトピックを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを併せて考えていく。	しつけや教育の仕方、あるいは教育システムといったものが、いかにその社会で適応的に生きる人々、つまりその社会にあった行動パターンや感情の働き方を身につけた人々を育てるために作り上げられてきたものであるかを、授業で扱う様々なテーマを通して理解する。		◎	○	
情報科目			情報システム概論	情報処理システムを構成しているコンピュータのハードウェア及びソフトウェアの基本的な役割や動作を学習する。アセンブラやデータベース機能などの実習も行い、知識の習得だけでなく、自らが設定した条件でコンピュータが実際に動く部分を自ら確認し、学ぶ。	コンピュータの構成、ハードウェア及びソフトウェアの動作やアセンブラなどを理解し、ITパスポートなどの試験の一部に対応可能な知識や技能の修得を目指す。			△	◎
情報科目			メディア情報基礎	マルチメディア作品をPhotoshopとPremierで作ろう。 メディアとしてのコンピュータに着目し、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。	PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。		○	○	◎

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
情報科目			ネットワーク基礎	世界中どこでもInternetで安全確実にコミュニケーションできるようになろう コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端的コミュニケーションツールの基本概念とその実現例を通して学ぶ。世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできる知識とスキルを修得する。	インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身に着ける。海外でのインターネットの利用とePortfolio活用のスキルを身につけ、学外での学習記録や在外帰国報告のための活用法と有効性を理解する。本科目の履修とリテラシ関連科目での既習知識を総合することで、ITパスポート等にむけての知識習得を目指し、さらに関連の上位科目に結びつける。			△	◎
情報科目			メディア表現法	Photoshopの応用テクニックをいろいろ学ぼう PCを使ってのマルチメディア制作とデザインの基礎を講義と実習を交えて学習する。とくにコンピュータ上でのメディアデータの特性とコンピュータによる画像処理、図形処理について表現・変換などの知識を身につける。Photoshopを基本ツールとして画像レタッチの諸技法を学ぶ。自ら写真を撮影し、いくつもの課題制作に取り組む。見やすい作品つくりを目指して、配置、コントラスト、整列などデザインの基礎知識を習得し、実習作品の表現に応用する。これらを通じて情報メディアの活用とメディアデータの処理技法を学習し、Webやパッケージメディアの視覚面をどのように活かすことができるかも学ぶ。セメスタ中の課題をクラス全体で合評することでお互いの作品の良いところを学び、質の高い制作を目指す。	Photoshopの応用技法を習得し、デザイン、配色の基礎を修得し、PC上の画像処理とデジカメ、プリンタ等の周辺機器との関係を理解することで、ディジタルマルチメディアの特性を活かした中級以上の作品制作ができるようになる。		○	○	◎
情報科目			メディアアートの世界	メディアアートの作品 世界を知り、自 作のプログラムでメディアアートの作品制作を体験しよう 本講義では芸術表現のためのプログラミング言語Processingのプログラム（スケッチ）基礎を学ぶ。またメディアアート作品の芸術論集を手がかりに、様々な作品例とそれらの構成手法を並行して学ぶことにより、メディアアートのためのビジュアルな表現手法を習得する。また現代的な潮流となりつつあるp5.js環境でのProessing流プログラムのWeb環境での実装についても学ぶ。	メディアアート作品の鑑賞のための技術的な枠組みと批評言語を理解できる。 Processingの制作環境での描画や対話機能を身に着け、メディアアートのための表現手法の基礎を習得する。 IoTやMakerムーブメントなどWebと現実世界が交差する今日的な環境、身の回りにある生活の道具がネットにつながるこれからの生活環境について理解し視野を拡げる。		○	○	◎
情報科目			プログラミング言語基礎	情報システムを構築する上で必要なプログラミングには様々な言語が用いられている。本講義ではオンライン併用環境であることを考慮し、使用言語をJavaScriptとする。ただし、基本的なプログラミング言語とも云えるC言語についても、データ型の概念、配列、関数、ポインタ、ファイル操作などのプログラミングに関する基本事項を学ぶために適宜補足として取り入れる。 JavaScriptやC言語を実際に使いながら基礎的な概念を学び、簡単なプログラムを作成する能力を修得する。	プログラミングの基本構成として記述/実行方法や基本的な文法を理解し、簡単なプログラムを作成する能力を修得する。 具体的には、プログラミングで用いる用語や概念を理解し、独力でプログラミングに関する本を読んで理解できるようになること、かつ簡単なアルゴリズムを学習することで簡単なプログラムを実装できることを目指す。				◎
情報科目			仮想世界研究	社会の重要なテーマとして「仮想世界」を取り上げる。仮想世界が人工知能と融合して新たな世界観が生まれつつある、と感じている人もいるだろう。本講義は「仮想世界」の問題に対して、受講生が主体となって具体的な視点を用いて検討できるよう、工夫されている科目である。 ●　手ごたえのない「現実」vs. リアルな「仮想世界」 ヒトはかつて仮想世界を作り出した。気がつくと、現実と仮想との境界はますます曖昧になってきたと感じられる。しかしこの2つが理想的にスムーズに接続された状態にはない。AR/XRやメタバースなど、これらを繋ぐさまざまな接合法が生み出されているが、試行段階とみるのが適切であろう。 　一方で、私たちの生活のさまざまな場面で、”手ごたえ”=リアリティ（現実感）が薄れつつある、とも指摘される。私たちの日常生活は、仮想世界が浸透することによって何が『変化』し、どのように『拡張』されたのか。そして、それは問題なのか。 ●　つながっているフリは寂しい？　でも親密なのはもっと怖い 「情報」を軸とする変革の波は、社会だけでなく私たちの考え方に対して、深く影響を与え続けている。しかし、私たちはこの変化の意味を十分に把握しているとは言えない。仮想世界がもたらす意味を問い直す。 仮想世界の問題は、物語ではない。私たちの生活に現実に起きている現象である。本講義を通じて受講生は、『ヒトは原初から巧みに仮想（バーチャル）な世界を作り出し、つぎつぎに自分の限界を超えてきた動物である』ことに気づく。この現象の論点を見究め、洞察することを目指している。	本科目の履修を終えると、次の基本主題とそれに対する考えを具体的な視点を駆使して説明できるようになる a. 人間は原初から巧みに仮想（バーチャル）な世界を作り出し、自らを拡張させてきた動物であること b. 仮想世界における「私」、それはもう一つの「私」なのか c.「仮想現実感」(VR)の基本要素とその根底をなす考え方 d. 仮想世界の社会のさまざまな側面への浸透と影響		◎	○	◎
情報科目			社会とデータサイエンス	情報化社会が発展・普及していく中で、様々なものがデジタル化されインターネットに接続されつつある。この授業では IoT（Internet of Things）やビッグデータ等に関連するデータサイエンスというキーワードから、パソコンで作成するデータだけでなくセンサや人の行動、公的機関からの公開情報等から得られるデータがどこでどのように利活用されているのかを学ぶ。また、データサイエンティストとはどんな人材なのかを議論しながら、様々なデータの性質や扱い方、可視化等を統計学等の観点から学び、実践する。	ビッグデータ、IoT、オープンデータ、といった言葉で表現される膨大なデータの利活用としてデータサイエンスのいくつかの事例と、そこから作られる情報や価値について学ぶ。個々のデータの具体的な内容ではなく、異なる内容や形式を持ったデータに共通する性質や、データを正しく扱うために情報科学だけでなく社会科学分野にも重要な統計学などを学ぶ。また、同じデータでも可視化の方法によって伝わり方が違う事を学び、実践する。		△	○	△
言語科目			世界の言語Ⅰ	世界の数多くの言語のうち，この授業では，インド・ヨーロッパ語族（印欧語族）の言語について考察していきます．この語族の言語は世界中に広がっていて，今では全ての大陸で話されています．この語族がどのようにしてできたのか，どのようにこの語族の言語が変化してきたのか，特徴はどのようなものか，世界の言語の中でどのような位置にあるのかについて知ることが，本科目のテーマです．	具体的には，以下の5つです． 1）インド・ヨーロッパ語族の言語について，その全体像を把握すること． 2）インド・ヨーロッパ語族について，その歴史を知ること． 3）インド・ヨーロッパ語族の言語の研究の方法や背景について知ること． 4）他の語族とインド・ヨーロッパ語族の関係について知ること． 5）一般的に，言語の歴史・構造について，知識を得ること．	◎	◎		

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
言語科目			世界の言語Ⅱ	この授業は「世界の言語Ⅰ」と交替で隔年開講されています．「世界の言語Ⅰ」がヨーロッパ諸言語に関する内容であるのに対して，この授業ではアジアの言語，特に東アジア漢字文化圏各国（日本，南北朝鮮，中国，台湾，ベトナム）の言語を中心に取り上げたいと思います．しかしそれに限らず，言語をとりまくさまざまな現象に関して言及しながら，みなさんの学習言語が何語であれ，その学習に少しでも役立つような話をしたいと思っています．人工言語として知られるエスペラントについても取り上げる予定です．	言語について公平な視点をもてるようになること（一例をあげれば「日本語は非論理的，英語は論理的」のような俗説に惑わされないようになること）．そして学習言語と日本語をさまざまな側面から対照できる力をつけること．以上のことを目標にして履修してください．	◎	◎	○	
言語科目			世界の英語	グローバル社会の現在、「英語」ほど広範に使用されている言語はありません。しかし、その「英語」とは一体どのようなものなのでしょうか。World EnglishesやEnglish as a lingua francaという言葉を聞いたことがありますか。英語の国際的普及は、地域の社会的要因に関連して多様化した様々な英語変種を生み出しました。英・米・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドの各英語だけでなく、インド、シンガポール、タイ、マレーシア等のアジア諸国でも多様な「英語変種」が存在し、これらはWorld Englishes（世界の英語たち）と複数形で呼ばれています。また、グローバル化の進展はビジネスや教育上の国際交流・協力の急速な拡大をもたらし、そのような現場で英語は言語文化の異なる者同士のコミュニケーションにおいて「共通語（a lingua franca）」として幅広く使用されています。本講義では、これらWorld EnglishesとEnglish as a lingua francaという2つの視点から、一見自明とも思われる世界における「英語」の実態について迫っていきます。 学期前半では、社会及び言語使用へのグローバル化の影響と英語の国際的普及の過程を概観した後、特に英米などの英語を母語とする国々とアジア諸国において多様化した英語変種の言語的特徴について、その歴史及び文化的背景にも触れながら学んで行きます。その後、学期後半では、標準語イデオロギー、英語母語話者信仰等の概念や現象についての学習を通して、英語を取り巻く問題について理解を深めます。更にはヨーロッパやアジア諸国での実際の事例研究を取り入れながら、ビジネスや高等教育等の国際的な場において言語文化を異にする者同士が、英語を共通語として使用してどのようにコミュニケーションを図っているのかについて、特にコミュニケーション・ストラテジーの使用を中心にその特徴を学んで行きます。最終的には、学習内容に基づき、グローバル社会における英語の役割と求められる英語コミュニケーション能力について批判的に考察できるようになることを目指します。	1. 国際的普及によって多様化した英語変種の地域的特徴（音声の仕組み、および文法等）とその歴史的変遷の背景について理解し、まとめることができる。 2. 国際共通語としての英語でのコミュニケーションの実態や特徴についてまとめることができる。 3. 標準語イデオロギーや英語母語話者信仰などの「英語」を取り巻く問題とその重要性について説明することができる。 4. 上記1-3を踏まえた上で、グローバル社会における英語の役割と求められる英語コミュニケーション能力について批判的に考察することができる。	◎	◎	◎	△
言語科目			言語の理論Ⅰ	知識ゼロの人向けの言語科学の案内です。知識を得るというより、取り上げるそれぞれの分野の「ノリ」を実感していただくことになるので、それぞれの分野が自分に向いているか向いていないかの判断の材料としてお使いください。	- 「言語」についての世間にあふれた誤解を解く。 - それぞれの分野への自分の向き・不向きの判断の材料を得る（あくまで「材料」に過ぎませんが）。		◎		
言語科目			言語の理論Ⅱ	この授業の内容は、「経験科学」としての言語学入門になります。いわゆる人文系の学生は、「科学」と聞くと一般に苦い顔をするものですが、それはおそらく「科学」に対する誤った認識によるものです。そのような誤解を解きつつ、統語論・形態論・意味論・音声学・音韻論といった言語学で基本となる諸分野を紹介し、各分野にどのような言語の謎があるのかを見ていきます。その紹介を通じて、受講者に言語研究における各分野ごとの雰囲気や基礎知識に触れてもらうこと、そしてその中から自分の肌に合う分野を探してもらうことが授業の目的となります。	1. 言語学の各分野における基礎知識を理解できる 2. 身近で話されている言語の事実に敏感に気付ける、また気付いた事実に対し初歩的な考察・分析ができる 3. 科学研究の方法論に対し、正しい認識をもっている		◎		
言語科目			社会言語学	社会言語学は文字通り「社会と言語の関係について研究する学問」ですが、この授業では、幅広い視野から社会言語学を概観し、言語的側面から歴史、社会、政治、そして日常生活を見直す考え方を身につけることを目標にしています。	世界中の様々な国に住む、様々な民族の言語状況に目を向け、その背後にある政治的・社会的・歴史的・民族的な要因を考える習慣を身につけてもらいたいと思います。それと同時に、自分の生活環境における言語的実情を自分で調べる「フィールド・ワーク」をする習慣を身につけてもらいたいと思います。		◎		△
言語科目			応用言語学	Applied Linguisticsの分野の中でもLanguage Acquisitionの理論、特に第二言語習得を中心に扱います。言語習得の分野で、どのような研究がなされてきたか、また、言語習得の過程はどのようにして明らかにしていくのかを、授業、及び実験への参加を通して学ぶ。	こどもはどのように母語を獲得するのか、そして大人の第二言語習得と母語習得とはどのように異なるのか、そして習得理論はその違い、および類似点をどのように説明してきたのかを学び、言語習得理論の知識を身につけることを目標とします。		○		
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語コミュニケーションⅠ	Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.	The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.	◎		○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語コミュニケーションⅡ	Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.	Building on the English language skills acquired in the first year required courses, the English 1-6 series, and English Communication 1, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語コミュニケーションⅢ	Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents weaknesses and what skill areas they need to improve.	Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅠ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will examine certain cultural phenomena that impact our lives. Emphasis throughout this course will be on the notion of 'possibility' -- the exercise of looking beyond mere appearance. The notion of 'possibility' will be used to explore three major themes -- art, rebellion, and market advertising. Each theme will be explored through short authentic readings, visual material, and music CDs, all of which will be used to set the groundwork for group discussions and an exchange of viewpoints.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course is designed to improve students' critical thinking ability by challenging their belief systems while examining three cultural phenomena - art, rebellion and advertising.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅡ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course is an introduction to the concepts and theories of Microeconomics for non-business majors meant to broaden and enhance students' worldviews and give them the English language tools necessary to deal with readings and conversations commonly found in the business world when English is used.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course aims to help students accomplish the following: 1) develop their knowledge of key vocabulary and concepts of economic theory with particular emphasis on microeconomics, 2) understand and be able to explain microeconomic models both verbally and graphically, and 3) analyze how changes in economic factors can affect individuals and entities within the economy.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅢ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will discuss and examine various cultural issues as well as make presentations on related cultural topics.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course explores English related to contemporary social and cultural topics, and offers a forum for students to talk about their experiences abroad and make contrasts and comparisons with life in Japan.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅣ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will discuss and examine various cultural issues as well as present on related cultural topics.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. Students will be able to examine cultural issues and gain a better understanding of how others see Japan. This course explores English related to contemporary social and cultural topics, and offers a forum for students to make contrasts and comparisons with life in Japan.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅤ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Through pair work and group activities, students will converse on such topics as world knowledge, personality traits, animal testing and gun control.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The aim of this application course is to acquaint students with certain social/global topics and for the students to communicate their thoughts on the topics with their peers.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅥ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Though Canada is the second largest country geographically in the world, it has a comparatively small population. This disparity makes Canada's size both an asset and its challenge. In the Canadian Life course, we will look at those features that make Canada unique. Study topics will include First Nation/Aboriginal Peoples, Canadian Arts, Multiculturalism and English/French Culture.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The Canadian Life course explores Canadian culture and lifestyle and Canada's development as a nation. Each class period will be divided into four parts: (a) a short lecture introducing the week's topic, (b) Canadian fact sheet questions and answers, (c) a guided topical conversation, and (d) short readings and presentations. This course is designed for students to be actively involved in all in-class activities.	◎		○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅦ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will examine how the great changes happening from around 1400 to 1600 affected Renaissance art, and we will also observe how Renaissance art was a reflection of social and cultural change.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The Renaissance was a historical period that brought profound changes in literature, science, government, and social customs. It is, however, perhaps best remembered for its artistic developments. Starting in Italy in the early 1400s and continuing into the Netherlandish Renaissance of Northern Europe, we will look at specific artists that embody these periods, their broader artistic context, and discuss the social and cultural changes taking place that influenced their work.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅧ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The objective of this course is the mastery of the English necessary to adequately present and discuss cultural topics of interest to the students. During each class meeting students will give short lectures related to cultural topics followed by classroom practice of various styles of English discourse.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅨ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. All third and fourth-year students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country through their Study Abroad experience, which is an Intercultural Communication Activity sometimes described as Cultural or Educational Tourism.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		英語アプリケーションⅩ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. We will first view successful presenters. Next we will discuss how and what makes their presentations effective. Finally, students will practice and present in class using an internationally acceptable style.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The objective of this particular course is to: 1) teach students the difference between domestic Japanese business presentation practices, and international business presentation style, and 2) prepare students to function effectively in an international business environment.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ドイツ語コミュニケーションⅠ	This course aims to develop basic communication skills in German. The focus is on building up vocabulary, grammar, idiomatic phrases, pronunciation, listening and writing skills in order to master simple everyday situations in a German context.	当講座では、学生一人ひとりがドイツ語で基礎的なコミュニケーションができるようになることを目指す。Basicな言語運用能力の一層の定着を目指す。	◎	○	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ドイツ語コミュニケーションⅡ	受講者が困難なくドイツ語圏で生活をするためと大学生活を送るために、積極的にドイツ語を使う必要があります。授業を通じて「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能を総合的に体得することが目標です。	受講者は困難なくドイツ語圏で学生生活を送れるようになること 少しでも多く話せるようになること 一つでも多くの単語と表現を覚えること がこの授業の目標です。 聴解力・読解力・表現力における弱点を補強し、基礎を確実なもの、使えるものとすることを目標にしています。	◎	◎	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ドイツ語コミュニケーションⅢ	This course aims to develop basic communication skills in German. The focus is on building up vocabulary, grammar, idiomatic phrases, pronunciation, listening and writing skills in order to master simple everyday situations in a German context.	想定された日常生活の具体的な場面の中で、学生一人ひとりが実際にドイツ語を使ってみることによって、ドイツ語のコミュニケーション能力の習得を目指す。	◎	○	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ドイツ語アプリケーション①	SAプログラムや派遣留学などを通じて獲得したドイツ語運用能力を維持し、さらに向上させるためのトレーニングを行います。ドイツ語の読む、書く、聴く、話す楽しみを存分に味わってください。	・ドイツ語圏の生活、文化、社会など多様なテーマに関する理解を深め、ドイツ語で表現・説明することができる。 ・抽象的なテーマについて、ドイツ語で自分の意見を述べ、議論に加わることができる。 ・まとまった分量の作文をドイツ語で書くことができる。	◎	○	◎	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ドイツ語アプリケーション②	Gymnasium等、ドイツ語圏の中等教育（中学校・高校）で用いられる地理や歴史、公民の教科書を、辞書や文法書を用いながらじっくり読むことでこれまでに身につけたドイツ語力をさらに高めます。	語彙や文法の複雑なドイツ語テキストにじっくり向き合うことでレベルの高いドイツ語を読めるようになる。ドイツ語圏に生きる人々の意識を知る。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ドイツ語アプリケーション③	Alltagskultur im deutschen Sprachraum ドイツ語圏の日常文化:日本と比較してみましょう。 この授業では身近なテーマから時事問題までドイツ語圏のいろいろなトピックにスポットを当てたいと思います。受講者はそれを理解し、自分または日本の実情と比較し、各テーマについて意見交換をします。簡単なディスカッションも試みたいです。批判的に問題を扱う姿勢、自己の生活文化を見つめ直す姿勢を育てます。Goethe-Institut等のドイツ語検定試験の準備として役に立つと思います。	1）中級以上のテキストを理解できる。 2）様々な領域の語彙を習得する。 3）基本的な文法事項を復習し、中級以上の文法事項を習得する。 4）幅広いテーマについて、明確に意見を述べ、時事的な問題への見解を表明し、 　長所、短所を挙げることができる。 5）簡単なコメントやショートエッセイが書ける。 6）簡単なプレゼンテーションを作成できる。	◎	◎	◎	△
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ドイツ語アプリケーション④	これまでに身に付けたドイツ語の運用能力をさらに高めるためのトレーニングを行います。授業では、簡潔に文意を捉える力を養うために、また、ドイツ語の構文を正しく理解し内容を精緻に把握する力を養うために、読解の訓練をしていきます。必要に応じて会話や聞き取りの練習も行います。ドイツ語圏の生活、文化、社会、政治、経済、歴史、現在の問題など多様なテーマに関する資料を用い、内容を把握します。	ドイツ語圏の生活、文化、社会、政治、経済、歴史、現在の問題など多様なテーマに関する理解を深める。ドイツ語の文章を正確に読み解く。迅速に文章の大意を把握できるようになる。ドイツ語の仕組みや、ドイツ語圏の人々の考え方を学ぶ。様々な文化との対比を通して、問文化性を理解する。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		フランス語コミュニケーションⅠ	フランス語のコミュニケーション力を発展させるクラス。フランス語会話を日常生活の中で使えるように土台をつくります。聞く、読む、話す、書くの四つの能力をまんべんなく鍛え、確実に学習事項を身につけられるように構成されているプログラムです。表現と、関連する文法の機能を体系的に理解する練習を行い、学習のごく早い段階からフランス語のコミュニケーションを可能にし、学習のモチベーションを与えたいと思います。	The goal of this course is the development of a communication skill in French at a basic level. The students will learn basic knowledge necessary to speak French. At the end of the course, the students are expected to do the following: improve comprehension and pronunciation in French use basic grammar and vocabulary for oral communication communicate in French about simple topics and know more about French culture.	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		フランス語コミュニケーションⅡ	スタディ・アブロード・プログラムで予定されているアンジェ滞在にむけ、必要な語彙や表現を、音声や文字のかたちで使えるようにする授業です。授業を紹介するショート動画をご覧ください https://youtube.com/shorts/aNjQOvzqamg?feature=shared 教科書Le Nouveau Taxi! 1を中心に進めますが、インターネット上にあるフランス語圏の動画や記事も利用します。	このコースが終わるまでに、学生の皆さんはつぎのことが最低限できるようになっているはずです： 1) 教科書で学んだ表現を耳で聞いたときに、その意味を理解することができるようになっている。 2) 教科書で学んだ表現を、フランス語で書くことができるようになっている。 3) 教科書で学んだ表現を、自分でも会話のなかで使うことができるようになっている。 4) 日常生活のさまざまな場面に関連する内容のテキストを読み、理解することができるようになっている。 5) 日常生活のさまざまな場面に関連する内容のテキストについて、感想を述べることができるようになっている。 6) 電子メールや簡単な手紙をフランス語で書くことができるようになっている。	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		フランス語コミュニケーションⅢ	フランス・アンジェへ行く前の直前準備講座。日常生活の中で、フランス語での中コミュニケーションがもっと細かくできるようにレベルアップさせる練習を行う。さらに基礎文法を固め、必須な語彙を増やし、フランス語のスキルを高める。練習問題は多くの場合はペアで行うように学習者同士のコミュニケーションが促される仕組みになっているプログラムです。	The main priority of this class will be the strengthening and brushing up of the speaking ability. Like last year, the students will learn to deal with facts and actions through everyday situations. At the end of the course, the students are expected to do the following : improve oral comprehension and speaking ability in French, use any further oral French in concrete situations and have more knowledge about French custom and culture.	○	△	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		フランス語アプリケーション①	Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé (A2/B1). Les étudiants travailleront les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit afin d'améliorer leur niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir leurs connaissances sur les cultures francophones.	Ce cours permet à des étudiants déjà assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : enrichissement du vocabulaire, développement des capacités de lecture et d'expression orales et écrites. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe au niveau B1, voire B2) et du 仏検 (2級 voire 準1級), ainsi que le concours pour partir en tant qu'étudiant en échange（派遣留学).	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		フランス語アプリケーション②	Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé (A2/B1). Les étudiants travailleront les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit afin d'améliorer leur niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir leurs connaissances sur les cultures francophones.	Ce cours permet à des étudiants déjà assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : enrichissement du vocabulaire, développement des capacités de lecture et d'expression orales et écrites. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe au niveau B1, voire B2) et du 仏検 (2級 voire 準1級), ainsi que du concours pour partir en tant qu'étudiant en échange（派遣留学).	◎	△	○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		フランス語アプリケーション③	2年間学んだフランス語の知識（語彙や文法など）を生かして、フランス語のコミュニケーション能力を高める授業です。日常の場面に応じて、フランス語で様々な練習問題を行い、フランス語を話す力を強めます。文法を復習しながら、新しい語彙や表現を覚えながら、フランスとフランスの文化についてももっと詳しく学びます。	授業の目標はコミュニケーションの力を上げることです。 次の三つのポイントに重点を置きます。 1. フランス語の日常会話をもっと聞き取れるようにする。 2. フランス語の文法の知識を高め、色々な練習に通じて強化する。 3. フランス語の語彙や言い方を増やして、使えるようにする。	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		フランス語アプリケーション④	Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français intermédiaire (A2/B1). A travers diffé rents types d'exercices, les étudiants pourront développer et renforcer leurs compétences de compr éhension et de production à l'oral ainsi qu'à l'écrit. Ils pourront aussi, à travers les thèmes étudiés, compléter et élargir leurs connaissances sur les cultures francophones, notamment à travers l'étude intensive d'un film.	Ce cours permet à des étudiants déjà assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : enrichissement du vocabulaire, développement des capacités d'écoute et d'expression orale et écrite. En lien avec les autres cours de フランス語アプリケーション, il permet la préparation des examens du DELF (niveau B1, voire B2) et du 仏検 (2級 voire 準1級).	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ロシア語コミュニケーションⅠ	日常的に使われる会話表現の習得を目標とする授業です。ロシア語の発音とイントネーションに慣れることから始め、挨拶、受け答えの基礎から徐々に語彙を増やしていき、最小限の日常行動が可能となるような会話の基礎を作ります。また、講師との対話（会話）を通して、現地事情を感じてもらえるような授業を目指します。	簡単なロシア語の質問を正しく理解し、答えることができる。簡単な言葉で自分のことを表現できる。文章を正確に読むことができる。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ロシア語コミュニケーションⅡ	現地学習に備え、必要な会話力習得を目的とする授業です。1年次に学習したことを基に、また、会話表現に必要な事項を補いつつコミュニケーション力をつける練習を繰り返し行います。	ロシアで学習、生活する上で必要な語彙を習得すること。ロシア語での質問を正確に理解し、それに適切に答えられること。自分の考えをロシア語で表現できること。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ロシア語コミュニケーションⅢ	現地学習に備え、必要な会話力習得を目的とする授業です。1年次に学習したことを基に、また、会話表現に必要な事項を補いつつコミュニケーション力をつける練習を繰り返し行います。	ロシアで学習、生活する上で必要な語彙を習得すること。ロシア語での質問を正確に理解し、それに適切に答えられること。自分の考えをロシア語で表現できること。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ロシア語アプリケーション①	これまで培ってきたロシア語の運用能力をさらに伸ばし維持することを第一の目的とします。ロシア語検定試験（ＴＰＫＩＩ）の問題に取り組んだり、ロシア語の動画を視聴したりしながらロシア語圏の文化に触れ、ロシア語の文法力を高めると同時に慣用表現、決まった口語表現を覚え、使えるようにします。	ロシア語能力検定試験3級程度、またロシア語検定試験（ＴＰＫＩＩ）基礎レベル（A2）から第1レベル（B1）のロシア語運用能力（聴解と文法）を身につけることを目標とします。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ロシア語アプリケーション②	ソ連・ロシア映画を3編とりあげ、その作品に関する評論をロシア語で読み、これを確認するかたちで映画作品を部分的に鑑賞します。読解力、聴解力を身につけます。読解についてはＴＰＫＩＩ第1レベル程度の力をつけることが可能となり、ロシアの日常や慣習、歴史について知識を得ることができるでしょう。	読解力を向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めるために、ソ連・ロシア映画の作品論をロシア語で読み、これを確認するかたちでロシア映画の珠玉に触れます。そうすることで、ＴＰＫＩＩ第1レベルの読解力、文法力を身につけると同時に、ロシアの文化や歴史に関する知識を獲得できるでしょう。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		ロシア語アプリケーション③	これまで培ってきたロシア語の運用能力をさらに伸ばし維持することを第一の目的とします。ロシア語ネイティブ講師との会話、リスニング練習、簡単な作文課題によりロシア語のコミュニケーション力を楽しくのびましょう。以前ロシア語短期語学研修に参加した学生は、培ったロシア語運用能力の維持のため履修を勧めます。	ロシア連邦教育科学省が認定するロシア語検定試験（ＴＰＫＩＩ）の基本レベル(CERF A2)又は第1レベル（CEFR B1）のロシア語運用能力（聴解と会話）を身につけるべき頑張りましょう。	◎	○	◎	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		中国語コミュニケーションⅠ	中国語の発音及び基礎的な文法事項の基礎を固めつつ、中国語のコミュニケーションに必要な知識を習得する。	中国語コミュニケーションに必要不可欠な発音と基礎的な文法に関する知識と技能を身に付ける。	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		中国語コミュニケーションⅡ	中国語コミュニケーションⅡは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学に向けて、中国語の作文力の向上を図ることを目的とした授業である。本授業では、テキストに記載されたポイントを教員が解説するとともに、受講生は日文中訳や並べ替え問題等に取り組むことで、既習の文法事項の定着及び作文力の向上を図る。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。	本授業の到達目標は以下の通りである。 (1)テキストに提示されている説明を精読し、中国語の基本的な文法項目を正確に理解する。 (2)日文中訳や並べ替え問題等の練習を通じて、基本的な中国語文を適切に作ることができるようになる。	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		中国語コミュニケーションⅢ	一年次の既習内容に引き続き、更に基礎を固め、読解力や表現力などのスキルアップにつないでいくことを目的とする。	一年次に習った内容を軸に、留学に必要な音読・訳読がこなせる。 コミュニケーションを取れるスキルがアップできる。 表現力を身に付ける。	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		中国語アプリケーションⅠ	中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。本授業では特に「読む」能力を重点的に育成する。	本授業の到達目標は、これまで積み上げてきた中国語能力を基礎に、長文の読解力を身につけ、それを翻訳力にまで高めることをめざしている。具体的には、中国の報道記事や評論文を辞書やネットを使用しながら十分に読めるレベルを目標としている。	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		中国語アプリケーションⅡ	中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞く、話す」という四技能をバランスよく育成することが必要であるが、本授業では主に「書く」能力を重点的に育成する。具体的には、作文や翻訳を行う際に注意すべきことをルール化して編纂されたテキストを用い、そこに提示されたルールを講師が解説し、そのルールを応用した各種の練習問題に取り組むことで作文力の育成を図る。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。	本授業の到達目標は以下の通りである。 (1)テキストに提示されている説明を精読し、中国語文法の特徴を深く理解する。 (2)日文中訳や並べ替え問題等の練習を通じて、難易度の高い中国語文を適切に作ることができるようになる。	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		中国語アプリケーションⅢ	中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベル中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞くと、話す」という四技能をバランス良く育成することが必要であるが、本授業では主に「話す」能力を重点的に育成する。	本授業の到達目標は以下の通りである： 1、正確な発音で中国語を話す。 2、日常会話を流暢に話す。 3、留学や就職などのために高度の会話能力を身に付ける。	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		中国語アプリケーションⅣ	中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。 中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞く、話す」という四技能をバランスよく育成することが必要であるが、本授業では主にe-Learningを利用した「聞く」力と「読む」力を重点的に育成する。	HSK4・5級の高スコア取得に必要な「聴力」（リスニング力）と「閲読」（リーディング力）を身につける。	◎	○	○	△
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		スペイン語コミュニケーションⅠ	The objective of this course is for students to become familiar with the spoken Spanish language.	That at the end of this course students are able to understand and develop simple conversations of everyday life in Spanish, that is our main objective./	◎	○	○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		スペイン語コミュニケーションⅡ	Our goal is to increase the students' ability to understand and express themselves mainly orally./ Nuestro objetivo es elevar la capacidad de comprensión y expresión, fundamentalmente oral de los alumnos.	We propose that, at the end of this course, students will be able to understand and express themselves in a variety of communicative situations./ Nos proponemos que, al final de este curso, los alumnos serán capaces de comprender y expresarse ralmente en diversas situaciones comunicativas.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		スペイン語コミュニケーションⅢ	The objective of this course is, as in the previous courses, to increase the oral comprehension capacity and ability to express.	They have to considerably increase their vocabulary and communication skills to prepare for the trip to Spain. Before that time, we aim to reach a level that allows them to make the most of their stay and their classes in Spain.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		朝鮮語コミュニケーションⅠ	春学期の学習内容を理解しているという前提で，文法と語彙をさらに学び，複雑な表現ができるようにつとめます．	授業で学んだ文の読み書きができ，声に出して言えるほか，自分で文を作り出す力（＝言いたいことが言える力）をだんだんと身につけていくことが目標です．	◎	△	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		朝鮮語コミュニケーションⅡ	この授業は、2年次秋学期のSAに備えるため、1年次で学んだ文法と語彙の基礎の上に「読む・書く・聞く・話す」の各能力を総合的に向上させることを目的とする。	1. ニュース等のメディアコンテンツを理解し、要点をまとめる能力を身につけることができる。 2. 韓国漢字音から日本漢字音への変換規則を習得することができる。 3. 最終的にはSAに通用する語学力を身につけ、韓国外国語大「韓国語文化教育センター」の「3級」に編入することを目標とする。	◎	○	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		朝鮮語コミュニケーションⅢ	1年次で学んだ文法と語彙の基礎の上に，「読む，書く，聞く，話す」の各能力を総合的に向上させることを目的とします． 2年次秋学期のSAに備えます。	SAに通用する語学力の習得，具体的には韓国外国語大「韓国語文化教育センター」の「3級」に編入できることを目標とします．	◎	△	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		スペイン語アプリケーション①	The objective of this course is to raise the level of the Spanish language of each student, through reading and analysis of written and oral texts, etc.	Improve your communication skills through the Spanish language.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		スペイン語アプリケーション②	In this course, students will be able to write narrative texts applying their previous and new knowledge.	At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		スペイン語アプリケーション③	In this course, students will be able to write narrative texts applying their previous and new knowledge.	At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.	◎	○	○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		スペイン語アプリケーション④	The objective of this course is to raise the level of the Spanish language of each student, through reading and analysis of written and oral texts, etc.	Improve your communication skills through the Spanish language.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		朝鮮語アプリケーション①	既に持っている朝鮮語の知識を活用したり、もっと包括的に知識を吸収できることを目標にします。韓国の新聞、雑誌、映像などを使って、テキストには出てない、自然な朝鮮語の使い方や、多様な表現を学んで自ら表現できることを目指します。授業は朝鮮語で進めていきます。	朝鮮語のニュースや韓国の番組を字幕なしで理解できることを到達目標とします。また、自分の意見を自信をもって積極的に話したり、討論に積極的に参加できることを目標とします。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		朝鮮語アプリケーション②	一定のテーマを決めてディスカッションを実施したり、韓国の文学作品を読んで、韓国の伝統・習慣・文学表現を習い、朝鮮語のレベルアップをはかります。朝鮮語の総合的能力の定着を目指すのがこの授業の目標であります。	積極的に韓国語によるディスカッションに参加したり、韓国の文学作品も読めることを到達目標とします。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		朝鮮語アプリケーション③	「SA韓国」から帰国した学生をはじめ、朝鮮語中上級向けのクラスである。朝鮮語・韓国語の児童文学を読み進めることで、朝鮮語の世界の広がりを体験する。日本語への翻訳する力の伸長を目指し、また内容について朝鮮語でディスカッションしたり、関連事項について調べて朝鮮語で発表したりする。これまで学習してきた「話す力」「書く力」などの定着を図り、自らの力で、朝鮮語・韓国語の世界を渡り歩いていける力を身に着ける。	韓国の児童文学を読むことで、朝鮮語の易しい長文を読み進める力を身に着ける。内容を読み解いたり、未知の事項を解明したりする力を養成し、日本語への翻訳についても実践学習する。同時に、内容に関する関連事項を調べ、より深い理解へとつながるような探求心を養成する。内容について、クラスの仲間と朝鮮語で意見交換などできる力を身に着ける。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション		朝鮮語アプリケーション④	「SA韓国」から帰国した学生をはじめ、朝鮮語中上級向けのクラスである。朝鮮語・韓国語の児童文学を読み進めることで、朝鮮語の世界の広がりを体験する。日本語への翻訳する力の伸長を目指し、また内容について朝鮮語でディスカッションしたり、関連事項について調べて朝鮮語で発表したりする。これまで学習してきた「話す力」「書く力」などの定着を図り、自らの力で、朝鮮語・韓国語の世界を渡り歩いていける力を身に着ける。	韓国の児童文学を読むことで、朝鮮語の易しい長文を読み進める力を身に着ける。内容を読み解いたり、未知の事項を解明したりする力を養成し、日本語への翻訳についても実践学習する。同時に、内容に関する関連事項を調べ、より深い理解へとつながるような探求心を養成する。内容について、クラスの仲間に朝鮮語で質問できる、朝鮮語で意見交換できるなどの力を身に着ける。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション		文化情報のデザインワークショップ（旧：情報コミュニケーションⅠ）	ユーザーの体験をデザインする『面白さ』と『奥深さ』を、実践的に学ぶ科目 私たちの日常生活はたくさんの道具であふれている。日常生活で出会う道具には文房具のような小さなモノからアミューズメントパークのような大きなモノまである。それらの道具が魅力的で使いやすいと日常生活も豊かで楽しくなる。 このワークショップでは、「道具を使いやすくデザインする方法論」と「新しい近未来の道具のデザイン」という2つのテーマに取り組む。 道具をデザインするという一見難しく思える課題を、手法の習得と実践の両方をバランスよく配置して、実践的に学べる科目である。 ● ユーザー調査を行い、特性を理解し、道具を使いやすくデザインする 講義の前半では、「道具の使いやすさ」に着目する。 私たちの日常を様々な側面で支えてくれる道具たちを、使いやすく魅力あるのにするにはどうすればよいか？ その鍵は、ユーザの特性と、ユーザに起こっている出来事の的確な理解にある。 道具のデザインを改良する具体的な方法論を、実習を通じて学ぶ。 ● 新しい、近未来の道具をデザインする 講義の後半では、「新しい近未来の道具のデザイン」に着目する。 まだ存在しない未来の道具をデザインするにはどのようにすればよいのか？ その手掛かりはユーザーの潜在的なニーズの把握にある。 利用者の生活が豊かになるような近未来の道具を考案し、コンセプトをデザインするための方法論を、実習を通じて学ぶ。	「道具をもっと使いやすくデザインすること」と「新しい近未来の道具をデザインすること」、この2つをテーマとして、デザイン手法を実践的に学ぶ。 ● 2つのテーマは学習内容が異なる。各テーマの基礎となる基本的な考え方、理論、調査計画の立て方、評価方法、データ収集方法、分析方法を学び、実践できるようになる。 ● グループワークの進め方、結果のまとめ方、成果発表の工夫を学び、実践できるようになる。		◎	○	◎
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション		文化情報のためのネットワーク技法（旧：情報コミュニケーションⅡ）	文化研究と成果発表の方法を身に着ける（旧科目：情報コミュニケーションⅡ） 【旧科目：情報コミュニケーションⅠ～Ⅲ共通テーマ】 文化情報学のいくつかのテーマについて情報スキルの重点的訓練を行う。コンピュータ設備を用いた実験・実習を通じて実験計画・結果分析・専門文献調査・考察・報告など方法論的訓練を行う。 【本科目の学習の目的】 本講義の前半において、Study Abroad環境すなわち在外環境におけるネットワークの実践的スキルと、研究倫理・データ倫理に基づいた問題解決の方法を学ぶ。本講義の後半では、文化情報編集のツールを取り上げる。GAS（Google Apps Script）を使ったGoogle Workspaceの統合・自動化の実習を例に、SA等の在外環境も含めた総合的な情報発信の有効性を学び、Web環境での有機的な情報共有を体験することを目的とする。	SAや卒業研究などのフィールドワークにおける異文化研究を成功させるために、文化情報の調査研究の方法論を身に着ける。インターネット環境を十全に活用し、学習成果を公開し蓄積する。現地調査で得られた知見や体験をリアルタイムに共有することでネット社会にフィードバックできる。		○	△	○

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション		視覚デザインと文化情報（旧：情報コミュニケーションⅢ）	情報デザインに関する入門的、実験的な実習授業です。ロゴタイプやシンボルマーク、ピクトグラムやイラストレーションなどのデザインやアートに関わる基本的なトレーニングを行います。	作品制作と並行して行う毎回のレクチャーを通じて、デザイン概念と視覚言語に関する理解を深め、人と人とのコミュニケーションを円滑にする視覚表現の基礎的なトレーニングを行います。加えて創作活動全般にも通じるクリエイティブな造形表現に必要な知識や感覚、技術を養います。 絵を描くことに苦手意識のある人や、デジタルでの写真加工やデザイン制作が初めての人も難しく考えずに、積極的に手や体を動かすことで作ることの楽しさを体験します。	△	◎	◎	◎
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション		情報アプリケーションⅠ	インターネットの発達により、ウェブページを取り巻く技術は近年ますます発展しており、その重要性も増している。近年では、どのような職業であれ、ウェブページの技術と無縁の職業はありえないといっても過言ではないだろう。 ウェブページを記述するHTMLは近年新しいバージョンが作られ、その表現力が増している。本授業では最新のHTMLをベースに、CSSやJavascriptなどを用いて表現力の高いウェブページを作るための技法について学ぶ。 JavascriptやCSSの技術を使えば、アニメーションを表示することも簡単にできるようになっている。最終的にはHTML5を使って簡単な3Dグラフィックスを表現する方法を学び、迷路のウェブページを構築できることをめざす（完成例としては http://www.edu.i.hosei.ac.jp/~sigesada/software/maze/maze.htmlを参照のこと。	ウェブページを記述する言語であるHTMLについて理解し、自分でウェブページを作成できるようになる。 CSSを使って表現力の高いウェブページを作成できるようになる。 Javascriptを使って動きのあるウェブページを作成できるようになる。 Three.jsを使って3Dグラフィックスを使ったウェブページを作成できるようになる。 インターネット環境で応用力のある豊かな情報発信能力を身に着ける。				◎
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション		情報アプリケーションⅡ	誰でも参加できる自由なモノづくりの世界的潮流、Makerムーブメントについて親しむ。実習形式でオリジナル電子楽器の製作を学ぶ。光、温度、圧力などの変化を検知してスピーカー、ディスプレイ、モーターなどの反応を制御する方法（意外と簡単！）を学び、自分のアイデアを作品として実現させる。	Makerムーブメントの背景と現状について理解する。 楽器音の基本的理解にもとづく電子楽器の構成法を知る。 Arduinoマイコンによるセンサー入力の処理方法が理解できる。オーディオ信号を中心とした出力の制御方法が理解できる。 課題実習と作品制作を通じて、アイデアを成果物に実現する方法を構想できる。 作りながら考える、考えながら作る自由闊達なモノづくりの精神を身に着ける。		◎	◎	◎
専攻科目	情報文化科目群	方法論	こころの科学	●　感動の想い出は、なぜかスローモーション あなたが日々体験している「まさに今、私のこころがはたらいている」という実感を手掛かりにして、「こころ」という不思議なはたらきと、その面白さを様々な角度から理解することを目指す科目である。 ●　「こころ」がはたらいている、と実感するのはどんな時？ 「こころ」とはいったい何だろう。「こころ」についてよく知っているつもりなのに、いざ説明しようとするとうまく説明できない。なぜなら、自分の「こころがはたらいている」ことをあまりに当然に考えているから。 　しかし、「こころ」がうまくはたらかない時や、あなたにとって初めての事、思いもよらない事に出会った時、その”存在”に気づくのである。実際に、あなたの「こころ」にとって想定外の現象は多く発生している。 ●　「こころ」とはいったい何だろう 「こころ」のしくみを理解する上で基本となる「感情がわく」「気づく」「覚える」「わかる」「誤る」「問題を解く」に着目し、解説を加える。学術的な説明の前に、一人ひとりの「リアルなこころの体験」を整理することから出発しよう。大切なのは、こころがうまく機能している状態だけでなく、「こころが上手くはたらかない」現象にも光をあてることである。 　ロボットや人工知能の分野では「こころを作ってみる」試みが急速に進む。一方で、「こころ」の探求は、単一の学問領域だけで本質に迫るのは難しい。心理学に加え、脳科学、人類学や言語学など様々な角度からアプローチが試みられ成果を上げている。「こころの科学」では、関連領域の知見を踏まえ、学際的な視点から「こころの科学」の基礎を学ぶ。	・感情がわく、気づく、わかる、覚える、誤る、問題を解く等、「こころ」のしくみを理解する上で基本となる事柄について、その要点を説明できるようになる ・感情の役割、アフォーダンス概念など、講義で解説される基本主題について、それらが「こころの理解」にどのような新たな観点を与えるのか、その意義を簡潔に述べることができるようになる	○	◎	◎	◎
専攻科目	情報文化科目群	方法論	こころとからだの現象学	こころとからだの関係を考える 　あなたたちには「こころ」が「あります」か？ 多くの人が「こころがある」と答えると思います。それでは、次の質問です。「それでは、あなたが言うように「こころがある」ならば、それは「どこにあります」か？」。ほとんどの人が「頭にある」、より正確には「脳にある」と答えるかもしれません。それでは、「こころが頭（脳）にある」ならば、こころと脳とは、どのように関係していますか？」。「こころがある」と答えた人に質問します。それでは、「こころは見えたり触れたり、知覚できたりしますか？」。もしも「こころ」が見えたり触れたりできないのに、あなたはどうして「ある」と言えるのでしょうか？ あなたは「自分で体験しているから」と答えるかもしれません。それでは、「自分で体験するから、「こころはある」のですか？ それでは尋ねますが、「あなたの体験は、あなたの「どこで」するのでしょうか？ こころで体験するのですか？ からだで体験するのですか？ 　私たちは、「こころがからだにある」とか「こころを持っている」と日常生活の中で疑問を持たずに漠然と信じています。ただ、哲学はこうした常識を徹底的に疑います。何も前提にしないこと、それが哲学的立場としての「現象学」のモットーです。そこで「こころとからだの現象学」という本科目は、「こころとからだ」を考え、それらがどのように結びついているのか（結びついていないのか）について徹底的に追求していきます。 「私が私である」であるとはどういうことか？ 　2024年度は、田中彰吾『生きられた「私」をもとめて――身体・意識・他者』を基本的なテキストとして、「私が私であること」が心身の経験とどのように関係するのかを考えていきます。 　今日の「私」と明日の「私」が同一の存在であることは、はたして「当たり前のこと」でしょうか。もし仮に、地球の裏側にいる誰かと「こころ」と「からだ」が入れ替わってしまったとき、どちらが「私」だと言えるでしょうか。あるいは、突然記憶喪失になってしまった人は、同じ体をもつ「この私」は、これまでの「私」と同じだと言えるでしょうか。それとは逆に、大きな事故に遭って脳神経以外の身体のパーツが全て機械と入れ替わってしまったと仮定したとき、同じ記憶をもっている「私」は、これまでの「私」と同じだと言えるでしょうか。 　さらに、今・ここにいる「私」と、「私の心」と「私の身体」の結びつきも、けっして「当たり前のこと」ではないかもしれません。たとえば、目の前の誰かが傷ついているときに、あたかも今まさに自分の身体が傷ついているかのような痛みが走ることがあるかもしれません。それとも、自分自身の身体がまるで自分ではないかのように、どこか現実離れした感じをもったこともあるかもしれません。 　いったい、「私」は誰で、どこにいるのでしょうか。今・ここで「この私」を生きるというのは、どういう意味でしょうか。 　本授業では、「私」と「こころ」と「からだ」の関係性について、過去の哲学者の考え方や、様々な思考実験を手掛かりとして学んでいきます。	・「私」と「こころ」と「からだ」の関係について、自分自身の頭で考える思考力を身につける。 ・「こころ」と「からだ」の基本的な思想史を学び、その上で現代的な問題と結びつける応用力を学ぶ。		◎	◎	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	情報文化科目群	方法論	ゲーム構築論	この科目では、情報学を適用したモノづくりの面白さと難しさをコンピュータゲームのモノづくりを通して学ぶ。コンピュータにはワープロ、メールソフト、ウェブブラウザ、ゲームなどありとあらゆるソフトウェアがあり、我々は日々それらの他人が作成したソフトウェアを利用しているが、これらのソフトウェアが実際にどのようにして作られているかについて知っている人はあまりいないのが現状である。そのためコンピュータで何かを行う場合、他人の作成したソフトウェアを探して利用する必要があるが、そのようなソフトウェアが見つからなければあきらめるしかない。 実際にはプログラミングを学ぶことで、簡単なソフトウェアであれば必要に応じて自分で作ることができるようになる。つまり、コンピュータのソフトウェアの消費者から、コンピュータのソフトウェアの生産者になることができるようになる。 日常にあふれるコンピュータのソフトウェアはどのようにして作られているのか？本授業ではソフトウェアの中でも親しみやすいコンピュータゲームのプログラミングの観点から具体的な方法論を、実験実習を通じて学ぶ。 コンピュータゲームの題材としては主に、占いや数当てゲームなどの初歩的なものからはじめ、最終的にはマインスイーパーやテトリスなどの知名度の高いゲームを扱う予定である。	コンピュータゲームのモノづくりを通じてコンピュータのソフトウェアがどのようにして動いているかを理解し、自分の力で簡単なソフトウェアを作り出すことができるような実践的な能力を身に着けることを目指す。				◎
専攻科目	情報文化科目群	システムと人間	道具のデザイン学	●　デザイナーだけではない。利用者の視点がデザインに役立つ！ 日常生活はたくさんの道具やサービスであふれている。日常生活で出会う道具にはコンタクトレンズのような小さなモノから建築物やアミューズメントパークのような大きなモノまである。それらの道具が魅力的で使いやすいと日常生活も豊かで楽しくなる。 利用者としてのあなたの体験に目を向けよう。お気に入りの道具を楽しむこともあれば、面倒な操作で不快になった体験もあるだろう。 ●　デザインすると、暮らしはもっと快適になる 暮らしの道具やサービスを使いやすく魅力的にデザインすることは、その道具の利用者の生活をもっと豊かで快適なものにすることに直結している。道具のデザインは重要である。そのデザインに、ユーザからの視点が非常に役立つことが分かってきた。 ●　ユーザの体験（エクスペリエンス）をデザインする、という考え方 ではどうデザインするか。本講義では、利用者にとって使いやすく、魅力的なものをデザインすることを目指す方法論「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」の基本から、デザイン手順までを実践的に学べる。それは、デザインする際の主役である「ユーザ」について深く理解し、特性を分析する作業から始まる。 「モノづくり」、特に道具・家具・文具のデザインに興味のある皆さんの参画を期待する。 文化や特性が異なるために摩擦が生じるのは人種や民族間だけではない。ロボットを始め、人が造った人工物と人間も、材質や見かけだけでなく、知的能力、言語コミュニケーション能力、感覚、情動などさまざまな側面において異なっている。このため、人工物と人間の間でも様々な摩擦が生じる。このことを学ぶことは、これからの社会に重要な、人と人工物が共生する社会について考える際の基礎となる。	UXデザインの基礎が身につく ・使いやすく魅力的な道具やサービスをデザインするための方法論、「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」の基本的な考え方を説明できるようになる。 ・デザインの基本原則から、ユーザ特性の分析方法、デザイン手順まで、実践的に説明できるようになる。 ・最終課題に取り組むことで、道具・商品・サービスのデザイン案を、利用者のエクスペリエンス(experience=体験)の観点からデザインし、企画を提案できるようになる。		◎	○	◎
専攻科目	情報文化科目群	システムと人間	情報セキュリティとプライバシー	PCや携帯電話などのようにネットワーク接続する情報機器を使用する際、ウィルスなど意図しないプログラムを引き込んで、被害にあうことがある。情報技術が社会基盤となり、広く一般に利活用されるに一方で、セキュリティや個人情報保護等の問題も広く認識されるようになってきた。この授業では、身近に利用している情報サービスに対するリスクや脅威を学習し、情報セキュリティやプライバシー、および匿名性に関する議論を行い、有効にネットワークを使用するため、ネットワークユーザー個人として、あるいは組織のネットワーク管理者としての基本的な知識と情報管理技術を身につけることを目標とする。 ネットワーク上のウィルス等の脅威から身を守るためには、ファイアウォールやアンチウィルスソフト等に代表される情報システム的手法と、ルールや法律によりそれを抑止する手法がある。両者を解説する。	・PC等、個人用情報機器を利用する上で、必要な情報セキュリティ知識を身につける。 ・より高いセキュリティを実現する方策を立案できる。 ・セキュリティを守るためにどのような社会制度があるかを理解する。			○	
専攻科目	情報文化科目群	システムと人間	文化と生物	文化という視点からみた生命の実像を学ぶ. 内容は大きく2つに分けて，(I-II)「ヒトを取り巻く文化と生物」と，(III-V)「生物それ自体とその進化」について講義を行う．分野は衛生学，美術，生物学，農業にわたり，生物情報をどのようにヒトが利用しているのかを学ぶ．	ヒトの生活と生物にまつわる歴史，文化そして，現代的な問題を解決する方法について，考え理解する．生物の多様性や進化について，考え理解する．現代の生物学は情報科学的側面を強く持っている.ここでは，生命活動における情報（主に遺伝情報）の特徴とその役割について，現代生物学の手法を体験し，現状を理解する．	○	◎	◎	○
専攻科目	情報文化科目群	システムと人間	文化と環境情報	生物は、それぞれの生活環境に適した結果、多様性に富んだ進化の道を進んできている。多様な環境条件下で生活しているヒトは、環境に適応するためにさまざまの技術や思考を創造してきた。人間の活動と環境の相互作用によって構築される文化に着目し、自然科学及び人文社会科学の多面的な視点から、ヒトを取り巻く環境から得られる情報と文化の成り立ちや持続可能な社会について学ぶ。	人間社会や文化が，生態系とどのように関わっているのかについて考え理解する．現代の生物学は情報科学的側面を強く持っている.ここでは，生態系，地球環境と，人間生活，食文化，病気などについて，現代生物学，栄養学，医学，保全生態学の観点から現状を理解する．	○	◎	◎	○

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	情報文化科目群	メディア	文化情報空間論	現代社会を捉える新たな視点として、『人工知能による人間と社会の拡張』の問題を取り上げる。時間軸の異なる3つの技法に着目する。 ●　人工物を次々に生み出すことで自らの限界を超える 人間は自然界で非力な存在である。人工物を次々に生み出すことで、自分の身体的・感覚的・知的な限界を超えてきた。その結果、この世界は自然的な世界と言えなくなりつつある。私たちは自ら作り出した人工的世界に生きている、と考えるほうがむしろ自然だろう。 ●　3つの『知』の仕組みに焦点をあてる　そしてどこに向かう？ 知的人工物は、ロボットのように人間から独立した分かりやすいモノだけではない。身体に装着したり、服に埋め込んだり、脳波で作動させたり、ヒトの身体や能力と一体化して機能する人工物も存在する。知的人工物は日常生活の至るところに埋め込まれ、暮らしと一体化することだろう。その時に、何が起こるか。 ●　これは人間の拡張なのか、人工的世界の拡張なのか まず「人工物の科学」(H.A.サイモン)を理解することから始め、それをベースとして「知的人工物との暮らしのデザイン」について学ぶ。講義の終わりには、「都市」や「社会」もある意味で空間化した知的人工物として捉えることができるようになる。	・人工物とは何か、それはどのように登場し、人間のもつ制約をどのように拡張してきたのか、「人工物の科学」の基礎を理解する。 ・人工物が知的に振舞う技法として、知識表現、ニューラルネットワーク、遺伝的アルゴリズム、3つの仕組みの基礎を理解する。 ・人間と人工物の共生を捉える幾つかの分析観点を学び、ある具体的な場面を切り出して、人工物によって拡張された暮らしのデザインに取り組む。	△	◎	○	◎
専攻科目	情報文化科目群	メディア	コンピュータ音楽と音声情報処理	PCでシンセサイザやエフェクタを自作する。音楽や音声を扱うプログラムを作る。本講義では、音を扱うためのビジュアルプログラミング言語であるPure Data(Pd)を使って、さまざまな音の表現方法を学び作品を制作する。人間の表現行為を工学的に扱うことで、人間と機械のよりよい協調をマルチメディア、特に音楽や音声などオーディオメディアにより実現したい。同時にMIDIやOSCによる他の機器との連携、ネットワーク環境での利用、IoTなど現代的な利用のあり方を学ぶ。	コンピュータ上で、音を生成する方法や、音の大きさ、長さ、音色、発音タイミングなどを制御する方法を習得し、サウンドプログラミングの基礎が理解できるようになる。Pure Data(Pd)に習熟しビジュアルプログラミングの考え方とコンピュータ音楽への応用が身につく。オープンソースソフトウェアとしてのPdの利点を認識し、Windows、MacなどOSや機器の違いに影響されない作品作り、電子楽器とコンピュータとの連携を構想できるようになる。音響モデリングの実現例が切り開く先端的な音響処理の分野を理解できるようになる。		○	△	◎
専攻科目	情報文化科目群	デザイン	コネクション・デザイン	この授業では、現代の家族関係や公共施設の在り方、シェアリング・エコノミー、ソーシャルネットワーク等の事例を見ていきながら、1989年にアメリカの社会学者によって提唱された「第三の居場所（サードプレイス）」のような機能は、現代においてはどのように形を変え、どのような役割を持つことができるのかを考察し、これからの人と人の繋がり方を考えていきます。	これからの“第三の居場所（サードプレイス）”を考えていくことで、現代社会における人と人、人と社会の繋がり方を受講者それぞれが再考察できることを目標としています。		◎	○	△
専攻科目	情報文化科目群	デザイン	情報の編集論	この授業では、“情報” を収集・分析し、効果的な表現を行う “デザイン” という方法論を手掛かりに、普段何気なく見ている広告（ポスターや新聞、雑誌等の広告）やコマーシャル（映像広告）、商品パッケージ（商品をパッキングしている箱や袋）を題材に、「情報の意味」を考え、「情報の編集」がどのように行われているのかを学んでいきます。	受講者それぞれが、何気なく見ているものの中にも「情報」が編集され存在していることを認識し、自身でその意味を考察できるようになることを目標とする。		◎	○	○
専攻科目	情報文化科目群	デザイン	文化情報の哲学	本科目は、国際文化学部が提唱する「文化情報学」という新しい学問を哲学的に基礎づけるための科目です。そもそも「文化情報学」とは、様々な文化現象を「文化情報」として捉え直し考察する学問として新しく構築するために考案された学問です。この学問では、それぞれ固有の文化現象のなかに共通する新しい〈意味〉や〈価値〉を見出し、「文化情報」として編集しなおして解釈し、「文化情報」としての〈新しい意味〉や〈新しい価値〉を創出したり、さらにそれらの〈意味〉や〈価値〉を付加して新しく発信することを目指します。 それでは、なぜ「文化情報学」を学ぶ必要があるのでしょうか。私たちは動機をもって物事に取り組むことで、手に入れたい「文化情報」を取捨選択できます。そうすることで不必要な情報を誤って手に入れることが減ったり、害悪になる情報を鵜呑みすることを少しでも減らしたりすることができるようになります。 そこで、本授業では、政治哲学者ハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906-1975）の「真理と政治」（1967）というエッセイを用いて、人々の主観の「あいだ」で見え隠れする様々な「真実」と「嘘」について考えます。 現代社会は、多くの「嘘」に覆われています。SNSでは虚実の入り混じった情報が飛び交い、ニュースで流れる政治家の言葉には様々な嘘が隠れています。国家権力やメディアによる組織的な「嘘」は、たんに「間違いである」というだけにとどまらず、出来事やそれに関わった人々の存在そのものを「無かったこと」にする構造を持っています。 しかし、そもそも正しい情報と虚偽の情報の違いはどこにあるのでしょうか。人々の主観の「あいだ」で構成される世界の中で、絶対的で客観的な「正しいこと」というものは存在しうるでしょうか。もしも、その中でなんらかの「真実らしさ」が見出されるとすれば、はたしてどのような形でしょうか。 本授業は、アーレントの政治哲学を学ぶことを通じて「自分の頭で他者とともに考える」という哲学的な考え方を学ぶことを目的とします。	(1)21世紀を生きる私たちにとって、「哲学する」ことがいかに重要であるかを学ぶことができる。 (2)哲学的思考を身につけることができる。		◎	◎	◎
専攻科目	情報文化科目群	デザイン	ソーシャル・プラクティス	「ソーシャル・プラクティス」では、ソーシャル・プラクティスあるいはソーシャリー・エンゲージド・アートと呼ばれる環境や政治、あるいはコミュニティやジェンダーなど、様々な社会的問題に直接働きかける美術の分野について学びます。社会と直接関わるような現代美術のアプローチに関する理論と実践についてのワークショップ形式の実習を行います。	この授業では、下記の3つのテーマで実習を行います。 1. 環境と社会 2. 共生社会 3. 政治課題 自分たちを取り巻く様々な社会的な課題を捉え直し、調査を基に自分なりに課題を設定して作品として表現する力を養います。	△	◎	◎	◎

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	表象文化科目群	表象の理論	サブカルチャー論	サブカルチャーは新興の文化流行として、大衆文化や通俗趣味に分類されるが、表現者たちにより洗練が加えられ、いつしかメインカルチャーとなってゆく。文学、美術、音楽、漫画、映画、旅行、衣食文化、政治、科学あらゆるジャンルを横断し、文化流行全般の考察を通じ、コミュニケーション能力の土台にもなる雑多な教養を身につける。とりわけ、技術論に焦点を当て、文化の様態の変容を時代ごとに考察する。	イデオロギーや哲学の代わりにキャラクターやコピーがものをいう現代、政治も文化も素人が担い手になってゆく風潮を踏まえ、柔軟な批評精神を獲得し、サブカル全般に関する教養の底上げを図ると同時に、先人の斬新な発想の秘密に迫る。講義内容のまとめや復習は各自が行うが，授業内で行った小レポート等、課題に対する講評や解説は授業の最後にまとめて行う。		◎		△
専攻科目	表象文化科目群	表象の理論	Gender and Japanese Culture	In this course, we will analyze how gender and sexuality issues manifest throughout culture in Japan. Why do we need to discuss gender and sexuality in relation to Japanese contemporary culture? Who do we talk about when we discuss such issues? We will approach these questions from different perspectives and disciplines, such as history, literature, media, etc. While the main focus of this course is the representation of gender and sexuality in contemporary Japanese society, we will also address these issues in a global context.	1. To become familiar with historical sources and social and political elements in regard to the construction of gender within contemporary Japanese society. 2. To develop critical thinking strategies and apply them in order to understand how gender and sexuality are represented within contemporary Japanese media. 3. To incorporate a gender perspective while participating in academic discussions, presenting on a selected topic, and writing analytical papers.	△	◎	○	
専攻科目	表象文化科目群	表象の理論	道具による感覚・体験のデザイン	「体験」という個人的な出来事を、受講生がアタマとカラダを使って「体験し直す」ことを目指す科目である。 ● 日常の体験こそ奥が深い 体験という言葉からあなたが思い浮かべるのは、忘れられない事、驚いたこと、可笑しな体験、つらかったことなど、ほとんどが『非日常的な』体験ではないだろうか。しかし体験の本質に迫りたいなら、むしろ、日常の体験の豊かさにこそ目を向けるべきである。本講義によって受講生は、一見些細に思える日常の体験においてでさえ、身体のさまざまな感覚は研ぎ澄まされ、わずかな世界の変化を感じ取り、豊かに感情が湧き起こり、体験が生み出されていくさまを理解できるようになる。 ● 『体験』から、空間をデザインする 今年度は、「空間の体験」を取り上げる。本講義を通じて受講生は、人間は他人との間にある距離・空間を絶妙にコントロールしながら、互いに巧みな空間行動をしていることを理解できるようになる。たとえばキャンパス、カフェ、エレベーターなど、多くの人々が行き交う場は、人間の空間行動の特性を観察し、解析するには格好の空間である。 身体は空間を感じ、体験を生み出す。空間のデザインによって、そこでの体験はどのように変化するのか。この理解をベースにし、日常の空間をデザインし直すことに取り組む。たとえばもっと快適に安らげるように、あるいはもっと自然な集中ができるように。 ● 体験をデザインする、ということ 「経験」「体験」(experience) が今ほど注目される時代はない。一方で「経験の危機」も指摘される。仮想世界の浸透も手伝って、私たちの「体験」はかつてない速度で変化が進み、どこまでが体験なのか、その境界はますます曖昧になりつつある。例えば、自分の身体と感覚を使って実際に体験していない出来事であっても、"あたかも体験したかのように"受け入れていることに気づく。本講義を通じて、この現象を、デザインの視点から批判的に問い直すことになる。	受講生はつぎの3つについて、基本用語を使って簡潔な説明ができるようになる。 1) 体験するとはどのようなことか 2) 人間は、どのように空間を身体で感じ、感情を働かせながら、人との距離や空間を互いに調節し、巧みな空間行動をしているか 3) 空間の体験は、その空間のデザインによってどのように変化するのか。 そして、これらの知識を用いて具体的対象に対して基本を実践できるようになる。 これらを目標とする。		◎	○	◎
専攻科目	表象文化科目群	メディア表現	マルチメディア表現法	本科目は、少人数ワークショップによるマルチメディア作品制作の実習です。 わかりやすく統合的に提示する手法を少人数ワークショップで学習する。画像、映像、音声など個々の編集技法の基本は既習のものとし、ここでの講義ではそれらの統合をコミュニケーションデザインの観点から学び、アイデアや表現意欲をコンテンツ制作に活かす効果的なオーサリングの戦略について学ぶ。またワークショップにおいては学習成果の体得をさらに確実にするために、ビデオ、Webマルチメディア、DTPなどの領域から練習課題を適宜設定する。受講者には各人の嗜好にもとづき映像作品、音楽作品やDTP作品などの個人プロジェクトを提案してもらい、セメスタを通じて制作する。	写真表現、ポスター作り、DTP、レーザー加工、映像制作などのマルチメディア実習を通じて、自らの発想を人に伝わるマルチメディア作品の形にすること、同じ課題で制作したお互いの作品を相互批評してセンスを磨くこと、作品をプレゼンテーションすること、これら課題制作の訓練を通じて作品作りの一貫したプロセスを身に着ける。		◎	○	◎
専攻科目	表象文化科目群	メディア表現	フィールドワークと表現（旧：メディア表現ワークショップ1）	表現活動に繋がるフィールドワークに関する実習授業です。各実習はワークショップ形式で行います。 教室や大学の構内外を3つのテーマ（カメラを持って旅に出よう。スケッチブックに記録しよう。動きや音を拾うことから。）によるフィールドワークを行い、その成果をプレゼンテーションします。	みなさんは課題を通じて様々な表現活動に通じる取材・調査方法や様々なメディアを使った表現方法を学びます。 各課題に取り組むにあたっては、自由な発想、臨機応変な対応が必要となります。柔軟な姿勢で（楽しんで）課題に取り組んでください。	△	◎	◎	◎
専攻科目	表象文化科目群	メディア表現	クリエイティブ・ライティング（旧：メディア表現ワークショップ2）	書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説、エッセイ等の書き方ABCを伝授する。メールから企画書、報告 書、論文、創作、これら全ては特定のセオリーに基づいているので、これらを踏まえつつ、説得力や感動を与える手法に触れ、実作を通じて、文章表現の向上を図る。	半期の授業を通じ、受講生は表現意欲や批評意識を刺激されるだろう。自己を語るコトバ、他者とのコミュニケーション能力を磨き上げるには、創作を実践することがショートカットになる。創作のエクササイズを重ねれば、説得力のある企画書の書き方、他者の関心を誘うプレゼンテーションの仕方も自ずと身につけられる。学生はそのスキルの獲得を目指し、課題をこなすこと。	△			◎
専攻科目	表象文化科目群	メディア表現	五感共生論	この授業では、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚という人間の五感の機能と役割を見ていきながら、それらが相互にどのように関係をしているのかを考察し、人は世界をどのように認識しているのかを学んでいきます。	受講者それぞれが、講義と課題制作を通して、自身の感覚を再認識できることを目指している。		◎	○	△

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	表象文化科目群	映像表現	映像文化論	高畑勲・宮崎駿の作品を、欧米のアニメ映画と比較しながら、主に彼らの作品のスタイルや映画史・アニメーション史上の位置を学習する。	1950年代～1990年代前半の日本のアニメの映画的・アニメ的特徴や制作体制について学び、現代のアニメ状況がどのように生まれたのかを知ることができます。またアニメや映画のスタイルを分析できるようになります。	○	○		
専攻科目	表象文化科目群	映像表現	写真論	現在、デジタルが主体となった写真について19世紀中頃の発明前後の歴史的背景から見直し、人間の知覚を拡げたメディアとして検証する。具体的に作品や作家論にも触れ、写真表現の可能性を考察すると共に、あたりまえになっている「見る」という行為を再考する。	写真について、メディアと技術の両側面から基礎的な論点を把握し、歴史や他分野との関係について考察できるようになること。	△	○	○	△
専攻科目	表象文化科目群	映像表現	映像と文学	大好きな小説やマンガが映画化・ドラマ化されたので、観てみたら「納得いかない！私の知ってるアレとは全然違うんですけど！」と感じた経験はありますか。この授業では「映像化された文学作品」を例に、文学作品（文字テクスト）から映画（映像）へというメディア・ジャンル変換の過程を分析しながら、芸術とメディアの関わりや、文学と映画のそれぞれが表現しうるものについて、自ら考えを深めていきます。あなたのガッカリした気持ち、あるいは「まあまあ期待以上」という気持ちの正体に、いつもとは違う視点から迫ってみませんか。	・さまざまな文学作品や映画に触れることで、文学と映画それぞれの形式的特徴や両者の関連、差異について理解を深めること。 ・「映画制作において参照された原典がある」現象の分析を通じ、受容美学やアダプテーションの理論の基本を学ぶこと。この点は読む人、観る人としての自分を反省的に捉える訓練にもなります。 ・美的な形式（表象文化）の分析を通じ、古典的なメディア論のテーゼの真意を理解すること。 ・「オリジナリティー」「模倣」「引用」「暗示」などの基本的な美学概念に触れ、芸術の社会的構築物としての側面を理解し、批判的思考の術を磨くこと。 ・この授業の経験を、どんな分野であれ自分のゼミでの勉強や卒論執筆、その他のさまざまな場面に役立てられる自分になること。 その上でこの授業が、皆さんのお気に入りの一作品が見つかる機会になれば嬉しく思います。		○	◎	
専攻科目	表象文化科目群	表象芸術	演劇論	ミュージカルも、テレビドラマも、映画も、オペラも、人形劇も、能も、歌舞伎も、宝塚も、演劇の一つです。音楽・美術・文学・舞踏を含む総合メディアである演劇は、古今東西の人間達の娯楽の中心に常にありました。 この授業では日本の古典演劇と近代西洋演劇との比較を軸に、演劇を構成する様々な要素、演劇を取り巻く様々な問題について考察します。その中で世界の演劇の多様なあり方や、基本的な演劇理論の応用を学ぶことにもなるでしょう。「なぜ我々／自分は演劇を見るのか」。様々な切り口から演劇を分析しながら、学生の一人一人がこの問への答えを探っていくことになります。	・近代西洋演劇と対比した、日本古典演劇の特徴を理解する。 ・基本的な演劇理論を理解し、実作品の分析に応用できるようになる。 ・時代や文化、ジャンルを異にする多様な演劇作品の比較分析ができるようになる。		◎	△	
専攻科目	表象文化科目群		ポピュラー音楽論	近代日本における大衆音楽文化の形成を学ぶ。幕末から太平洋戦争終結までに現れた「人々」のための音楽動向を、近代日本音楽史、メディア研究、文化産業論、国際関係史などの観点を交えて検討し、J-ポップの原型となる大衆的な音楽文化環境がいかに成立したのかを理解する。現在との連続性を知るために、近年の音楽動向についても随時参照し、日常的に接している音楽を歴史的な観点で捉えられるようになることを目指す。	・音楽史を、作品/演奏の様式だけでなく、制度やイデオロギー、産業や消費行動などの社会的要素を交えた観点から理解できる。 ・近代日本の音楽をめぐる諸問題について理解し、現代とのつながりや、他地域の音楽文化との関連を考察できる。		○		○
専攻科目	表象文化科目群		コミックス論	海外で日本のマンガが人気だという話をしばしば耳にします。実際、日本のアニメ・マンガを原語で楽しむために日本語を学ぶ外国の若者は、おどろくほど多いです。しかしながら、海外における日本マンガ受容の実態を、わたしたちは本当に知っていると言えるのでしょうか。あるいは、そもそも日本語における「マンガ」という表記はどこまでを指し示せるのでしょうか。 本授業では、マンガを理論的、歴史的、社会的な側面から概観します。そうすることによって、自覚的／客観的に「マンガ」をとらえなおすきっかけを提供したいと考えています。	◆マンガの歴史について基礎的な知識を身につける。 ◆マンガが自明な概念でないことを理解し、社会的な観点から説明できるようになる。 ◆普段なにげなく読んでいるマンガについて、その表現の仕組みを理論的に指摘することができる。		◎	○	○
専攻科目	表象文化科目群	表象芸術	空間デザイン論	「空間」は、都市、建築、アート、グラフィック、映像などさまざまなデザイン手法が駆使されたメディアである。各々の領域で論じられている「空間」を講義と体験を通して多角的に理解し、空間デザインを表現・伝達する理論的かつ実践的な方法論を学ぶ。	本講座は、デザインの制作技術を習得するのではなく、空間デザインを操るリテラシーを高めるとともに、空間が背負う社会的・文化的背景や文脈を理解する力を養うことが目標である。講義を通して理論を学び、フィールドワークでは講師とともに建築を巡り、空間を読み解き、その魅力を感じ取る力を身につける。	△	○	◎	△

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	表象文化科目群	表象芸術	比較表象文化論	学生は、オリエンタリズムとジェンダー論、それぞれについて基本的な枠組みを学んだあと、オペラ、バレエ、映画、舞台などの具体的な作品に対して、理論を応用した分析を試みていきます。	・作品分析のツールとして理論を使いこなす力をつけるとともに、様々な表象文化作品の比較分析に必要な、基本的な能力を身に着ける。 ・作品をとりまく時代・社会・文化が作品にどのように反映されているのか、また、伝達手段（メディア）が作品の表現にどのような影響を与えているのか、という表象文化分析に必須の問題意識を高める。		◎	◎	
専攻科目	表象文化科目群	表象芸術	異文化と身体表現	いくつかの舞踊の発生の経緯、発展のプロセス、文化的意義について学ぶ。身体運動のメカニズムや表現技法を細かく分析するのではなく、宗教、性、習俗、観光化といった身体にまつわる社会的な問題を、舞踊を通して、異文化という視点から理解する。	・舞踊の歴史的・文化的背景を叙述することができる。 ・諸地域ごとの舞踊の知識を踏まえつつ、日本の能、歌舞伎、文楽等の特徴を、日本文化を知らない人に対して説明することができる。		◎	○	
専攻科目	表象文化科目群	表象芸術	パフォーマンスの美学	本授業の目的は、身体表現を主軸に展開されてきた現代の「パフォーミング・アーツ（performing Arts）」のもつ文化性・政治性・社会性について、「美学＝感性学（aesthetics）」的立場から捉え直し、考察を深めようとするものです。 2024年度は、長年、美術（Fine Arts）や舞台芸術（Performing Arts）の現場に関わってきた講師が、今まで交流してきた数々のアーティスト、特にコンテンポラリー・ダンスや現代パフォーマンスを基軸に活動するアーティスト、振付家、演出家などの活動を具体的に取り上げ、彼らの表現についての知見をひろげ、表現が生み出される背景を考察します。 取り上げるアーティストは、トリシャ・ブラウン、メレディス・モンク、ロバート・ウィルソン、ピナ・バウシュ、アンヌテレサ・ドゥ・ケースマイケルなど、世界的に活躍するコンテンポラリー・ダンス及びパフォーマンス界の巨匠たち。彼らの生み出した作品を通し、「身体表現」の可能性や、それがもたらす（beauty）、さらにはその現代性についての批評的思考を深めます。	(1)現代における舞台芸術や美術などアーティストたちによる表現の傾向について、さらには広くアートの歴史とその現在地についての知見を深めることができる。 (2)アートを通して「クリエイティビティ」とは何か？またそれが社会環境にどのような影響をもたらすのか、について学ぶことができる。 (3)身近にあるアートを鑑賞し、考察することにより、自らの視野を広げ、教養を身につけ、価値観を育むことができる。 (4)アートの最先端とその歴史に触れることで、その背景にある哲学やコンセプト、思想について知見を深め、また批評的視座を身につけることができる。		◎	◎	
専攻科目	表象文化科目群	表象芸術	現代美術論	今日の現代美術の世界は、様々な分野の最先端の芸術の分野（美術、建築、音楽、パフォーミングアーツ、映像、詩など）が複雑に交差しながら形成されています。この講義では、現代美術の多様性に焦点を当て、理論と実践の両面から探求します。現代美術のコンテクストを社会学、人類学や科学など他の領域かと対比しながら分析し、その中で多文化主義・関係性・コミュニケーションなどのテーマを読み解いていきます。こうしたアプローチを通じて、現代美術がどのように社会的、文化的な変化と相互作用しているかを深く理解するための基盤について学びます。学と比較参照し、多文化・関係性・コミュニケーションなどをキーワードに読み解いていきます。	講義では、現代美術と関連のある芸術分野についても扱い、様々な芸術の分野における実験的なアプローチを検証し俯瞰することで、それらの考え方、アイディアについての理解を深めます。 みなさんには馴染みの薄い分野であると思いますので、最初に美術史や美術理論の基本的な知識を確認します。また、講義の間にワークショップ（感覚的、体験的に学ぶこと）を行い、より理解を深めていきます。	○	◎	◎	◎
専攻科目	言語文化科目群	世界の中の 日本文化	世界の中の日本文学	この授業では、一つの国、一つの言語、一つの文化に限定されない国境を越えた文学について学びます。さまざまな作家・作品を読みながら、日本文学における世界/世界文学における日本について考えます。また、現代小説を分析するしながら世界における日本文学の位置付けについて考え、現代社会を考察するための視座を身につけます。	1）現代日本文学についての基礎的な知識を身につける。 2）日本文学のテクストを分析できるようになる。 3）文学と社会の関連性について学び、世界から見た日本/日本から見た世界について自分の考えをまとめられるようになる。		◎	◎	
専攻科目	言語文化科目群	世界の中の 日本文化	世界の中の日本語	外国語を学んだつもりがど忘れし、海外の文化に触れたつもりですっぽ抜ける。現代社会でおなじみのこの悲喜劇の一因は、そもそも日本語と日本文化に対する理解の浅さに起因するのではないか。言葉や文化はどのように出来上がり、どのように相関するのか。この授業では幕末から二十世紀末までの日本語を、近代文学を素材として、主に海外との応答関係のなかで見つめてみたい。原典のみならず英訳されたテクストにも目を向け、必要に応じて外国文学との比較にも供してみる。また、古典文学との比較などを行いながら、日本の近代性についても検討する。講義は春学期に開講される「日英翻訳論」と響き合う内容となっている。	比較的な視点に立つことで、自国の言語や文化を海外のそれと横並びに眺めたうえで、客観的な評価を加え、それを言語化できるようになる。文学作品を深く読み解く技術が身につき、英語のテクストに触れることで、語学的な運用能力も向上する。現代言語学を中心とする文学理論の知識が身につく。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	世界の中の 日本文化	日英翻訳論	英訳を通して日本語に触れることは、ときに日本語のみを媒介とするよりも明瞭に、日本語の実像を描き出してくれる。その果てに見えてくるのは日本語に特有のもの、すなわち日本語のエッセンスであるから、実はこの授業のタイトルは「日英翻訳不可能論」とすべきである。この授業では、とくに「裸」の状態に近い日本語に触れるために、古典の英訳を中心にとりあげる。講義は秋学期に開講される「世界の中の日本語」と響き合う内容となっている。	英語の運用能力が向上すると共に、受験勉強の「負の遺産」をなげうち、自由なアプローチで古典本来の味わいを楽しめるようになる。現代言語学を中心とする文学理論の知識が身につく。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	世界の中の 日本文化	実践翻訳技法	完璧な翻訳は存在しない。だからこそ、翻訳は楽しい。この授業では、英語（など）を日本語に、日本語を英語（など）に置き換えることをひたすら繰り返しながら、言葉の仕組みについて学び、またその仕組みが文化ごとにどのように異なるのかを考える。なお、本授業はあくまでも言葉についての理解を深めるための授業であり、職業的な翻訳家の養成を目指すものではないが、そのような志望をもつ学生にとっても有益な内容であることは言うまでもない。	日本語と英語を中心に、言語の仕組みや文化との相関について理解し、具体的な言葉で説明できるようになる。翻訳はもちろん、比喩などの文彩についても学び、実践を重ねることで、言語運用能力の本質的な向上を図る。	◎	◎	○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅰ（現代中国社会）	本講義は、現代中国社会に関する基礎知識を習得し、歴史・政治・経済・民族・文化などの側面から現代中国を総合的に理解することを目的とする。現代中国の社会と文化の多様性、日本を中心とする東アジアとの繋がりについて、多角的視点から思考を深めることを重視する。具体的には社会の各側面・文化に焦点を当てながら、その背景となる歴史・政治・経済・日中関係について説明する。トピックを重視し、等身大の中国について紹介する。	①現代中国社会に関する基礎知識を習得する。 ②現代中国社会に関する重要な事柄について、多角的視点から根拠に基づき自らの見解を論理的に説明することができるようになる。 ③等身大の中国を知り、中国に関するマスメディアの情報を客観的・多角的に捉えるようになる。		◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅱ（多民族社会中国）	中国文明は、多様な風土のなかで、独自の歴史と文化を築いてきた様々な民族が交流・衝突・融合を繰り返し、形成されてきた。 1949年中華人民共和国成立後、嘗て400以上あるとされたエスニック・グループは、国家制度である「民族識別」によって、55少数民族となった。民族比90%以上占める漢族と合わせ、新たな「中華民族」が提唱された。広大な領土に内包している複雑な民族間のせめぎ合いは、現代中国の抱える大きな問題である。 本講義は、歴史や伝統文化の側面から民族の多様性を紹介するとともに、20世紀以降、国家統合を進める中で少数民族社会に生じた変化に焦点を当て、中国における国家と民族集団との関係、民族間関係、民族意識の現状などについて講義する。	「民族」をキーワードにして中国を読み解く力を養う。特に民族の多様性と国家統合との関係及び現状について理解を深め、異文化理解・多文化共生という視座から読み取ることができることを目標とする。		◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅲ（日中文化交流史）	二千年以上に及ぶ交流の中で、中国の人々は日本にどのようなイメージを持ってきたのか。各種文献や映像資料を通じて、古代から現在までの対日イメージの変遷を概観し、そこから何を学ぶことができるか考える。	中国の人々の対日イメージがどのように変遷してきたのか、また、いかなる要因によって変化したかを歴史的に理解することにより、この隣国の人々とどのようにつきあっていくべきかについて、適切な判断ができる力を身につける。 By the end of the course, students will be able to: Understand the reasons for the difference between how Japan sees itself and how they are perceived by China and Taiwan from a historical perspective. Take appropriate actions to build good relations with both China and Taiwan.	△	◎	◎	△
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅳ（中国語の構造）	初級中国語の学習を終えて、学ぶべき文法項目は一通り学んだにも関わらず、中国語文法の全体像や細かい点が明確に把握できていないと感じている人は多いだろう。本授業では、初級中国語の文法事項を復習しつつ、より発展的な内容を学び、中国語文法の体系的知識を身につけることを目標とする。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。	本授業の到達目標は以下の通りである。 (1) 初級中国語で学んだ文法項目を確実に定着させる。 (2) 応用的・発展的な文法項目を学び、中国語文法を体系的に理解する。 (3) 比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようになる。	◎	○		
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅴ（中国語と日本語）	初級中国語の学習を終えて、中級段階に進んだ際に、難易度の高い中国語の意味を取り違えたり、中国語作文において間違った表現を使った経験がある人は多いだろう。また、中国人日本語学習者の日本語に触れた時、その日本語が不自然だと思いながらも、その理由をうまく説明できないという経験をした人もいるかもしれない。本授業では、このような誤用例にスポットをあて、なぜそのような誤用が起きるのか、どのような表現にすれば適切な中国語／日本語表現になるのかを的確に分析できる力を養う。また、日中対照研究的視点から中国語を見ることにより、普段何気なく使っている日本語の文法的特徴を考える視点も養う。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事	本授業の到達目標は以下の通りである。 (1) 中国語／日本語学習者の誤用例の検討を通じて、その原因を自分なりに説明できる。 (2) 授業資料に示された事柄の考察等を通じて、日中両言語の文法的諸特徴を適切に理解する。 (3) 比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようになる。	◎	○		
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅵ（古典思想・文学）	この授業では、代表的な中国古典のうち『論語』『易経』『老子』『荘子』『孫子』を取り上げて、その内容を学んでいきます。これら諸子百家の思想はしばしば独立ないし対立するものとして扱われますが、実際には古代社会の人々の精神文化の基層となるいくつかの論理を共有しています。実際に古典を読み解いていく中で、そうした中国文化の基層的な論理が、二千年以上の時を越えて現代社会においても機能している事例を発見できるようになります。	＊中国古典が現代まで読み継がれてきた経緯 ＊中国古典を現代語訳で読むときの注意点 ＊中国古典の背景となる当時の社会環境 以上の内容を学ぶことで、中国古典の基礎知識を身につけ、現代の日本社会をより深く理解するための比較対象として中国古典を活用できる力を身につけることを目指します。	○	◎	◎	△
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅶ（近代文学）	20世紀初め、中国でも言文一致運動（「文学革命」）が提唱され、「近代文学」が誕生します。中国近代文学は、近代以前の文学のあり方をどのように変革しようとしたのでしょうか。またそれは、欧米や日本の近代文学とどのような点で共通し、どのような点で異なっていたのでしょうか。本授業では、そうした問いを通して、中国近代（社会・文化）の歩みを文学の視点から考えます。	中国近代文学とその歴史的・社会的な背景への認識を深めるなかで、中国近代の社会と文化を理解する重要な手がかりを獲得していただければ、と思います。		◎	◎	
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅷ（現代文学）	1949年「新中国」建国後から現在までの文学を振り返ります（数篇、映画も取り上げます）。中国大陸に限らず、中国語圏である香港や台湾の文学を含みます。	中国現代文学とその時代的・社会的な背景への認識を深めるなかで、中国現代の社会と文化を理解する重要な手がかりを獲得していただければ、と思います。		◎	◎	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅸ（中国俗文学）	SAを機会に日本文化について改めて考え直す機会を得た人も多いだろう。しかし、日本文化とは何かを考えるには、古来、日本文化に多大な影響を与えてきた中国文化への理解が不可欠である。 この授業の目的は巨視的・微視的という二つの視点から中国文化史を通観することにある。 巨視的な視点からいえば、中国文化が東アジアの諸民族に及ぼした影響は計り知れない。表意と表音という二つの機能を備えた漢字の発明は、言語を異にする東アジアの諸民族に漢語という共通言語(Lingua Franca)を与え、それを基盤とする文明圏の成立と高度な精神的交流を可能にした。漢代以降、中国の国教となった儒教は、東アジアに倫理観にもとづく国際秩序と社会秩序を与え、サンスクリット語仏典の漢語への翻訳は東アジアに仏教という世界宗教を成立させた。紙や印刷術の発明は東アジアのみならず、世界の文化の発展と普及に革命的な影響を及ぼした。 いっぽう微視的な視点からいえば、中国歴代の文学、とりわけ市井の人々の間で次々と生み出された俗文学は、東アジアに庶民の文学を生み出す契機を与えた。この授業でも取り上げる三国志演義や水滸伝などは、わが国の文学にも多大な影響を与えている。	中国の古代から近世に至る文化史を理解し、東アジアという広い視野から自文化を考え、説明できる力を身につける。	△	◎	◎	△
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅹ（歴史）	言語・儀礼・服装など日常生活と密接な関係を持つ事柄から始め、近現代中国の世界へと入っていく。日本人にとっては隣国でありながら遠く感じられている中国の存在が、より一層身近になるようにすることが本授業の目的である。中国文化の中から幾つかのトピックを取り上げて、その歴史的な背景・影響を紹介・解説する。	現在、日中両国民間の信頼関係は十分とは言えない。その原因を追究するには、近現代の日中関係史を避けて通ることはできない。19世紀末に日中両国の地位が逆転してから今日にいたるまでの日中関係が、現状とどのような因果関係にあるのかを、この授業を通じて知ることができる。そのうえで日中間の相互信頼を醸成する可能性を探り、異文化理解の方法を習得することができる。		◎	◎	
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	朝鮮語圏の文化Ⅰ（朝鮮半島の文化史）	朝鮮半島は，日本の隣国、隣人であり、地理的にも歴史的にも、日本と密接な関係のある地域です．この授業では，朝鮮半島の文化や歴史、社会についての基礎事項を学びます.近年、朝鮮半島は、アジアへ、また世界への影響力を増しています。長い歴史の中で、朝鮮半島は、中国の影響を受けつつも、独自の文化・歴史を形成し、さらには日本へも大きな影響を与えてきました。朝鮮半島についての基本的な知識を身につけ、あるべきパートナーシップとは何かを探求することを目的とします．	朝鮮半島独特の文化や歴史に関する基礎知識を身につけることによって，日本など周辺国との類似性や差異性についての考察ができるようになり、また東アジア全体を見渡すことができる広い視野を獲得します.さらに興味のある分野について，自分から引き続き勉強を続けていけるような力を身につけます．		◎	◎	
専攻科目	言語文化科目群	アジアの文化	朝鮮語圏の文化Ⅱ（朝鮮語の構造）	朝鮮語を音声，文字，語彙，文法などさまざまな面から言語学的に観察することによって，朝鮮語の力を高めるのに（さらに言えば他の外国語を学ぶにあたって）役立つ知識を提供することを目的としています． また日頃接する機会の少ない，北朝鮮の言語と，さらに方言と古語についても言及したいと思っています．	この授業は，実践的な語学力をある程度もつであろう受講生が，その裏にある文法や語彙などの「ルール」を理解することで，ブロークンではないきちんとした語学力を身につけるのに役立つことを目的としています．	◎	○	◎	
専攻科目	言語文化科目群	ユーラシアの文化	ロシア・中央アジアの文化	本講義で学生は、中央アジアの過去と現在について学ぶ。中央アジアを理解するにはその複雑な歴史を知らなければならない。それによって、学生は、現代の中央アジアの社会と文化、ロシア・中国を含めた国際関係について理解する。	(1)ロシアおよび中央アジア諸国の歴史と現状に関わる様々な事項を説明できる。(2)ロシアと中央アジアの類似点及び相違点について自分なりに考察できる。	◎	◎	△	
専攻科目	言語文化科目群	ユーラシアの文化	ロシア・東欧の文化	ロシアといわゆる東欧諸国は、宗教、民族、イデオロギー、国家間の勢力均衡などの問題により、絶えず、支配被支配関係をさまざまなかたちで築いてきました。ソ連邦崩壊後、大方がEU加盟を果たした東欧諸国。しかしそのなかで経済的には「優等生」と位置付けられてきたハンガリーが政治的にはEUのなかで足並みを揃えない傾向にあります。なぜでしょうか。 この講義では、ロシアと東欧諸国（おもに、ハンガリー、ポーランド、チェコ）と今では北欧に分類されるエストニアのそれぞれの民族的差異や特殊性を、主に文化や風土、歴史を通して見る一方で、それぞれの関係性に焦点をあてる作業も行い、文化の相貌を概観すると同時にナショナリズムの問題を提起していきます。さまざまな情報から、国家や民族のありかた、複数の民族が共生するとはどういうことかをみなさんに考えてほしいと思います。 本講義は、SAロシアの事前学習科目なのでSAエストニア（SAロシア代替）の2年生は必ず履修してください。	この授業は、受動的に講義を聴いたり映像を鑑賞するのではなく、多数の情報から自身の感想や見解を導き、教員が提起した問題に対して意見を短時間のうちに適切な文章でまとめる力をコメントシートを通して養うことも目的としています。学生のみなさんは、つねに問題意識や批判的観点をもちながら、授業に臨んでほしいと思います。	◎	◎	△	
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	ドイツ語圏の文化Ⅰ	【近現代ドイツの歴史と文化】 ドイツ語圏のうち、主に近現代のドイツとオーストリアを扱います。日本が明治維新に湧いた頃、ドイツもまた史上初の国家統一をなしとげ、近代国家としての一歩を踏み出しました。ドイツ帝国の成立から二度の大戦、東西冷戦と分断国家の成立、ドイツ再統一とその後に至る歴史を、文化と芸術を通じて概観します。	第1の目標は、近現代ドイツ語圏の文化と歴史に関する理解を深めるとともに、抽象的概念や文化に対する知的なアプローチの方法を学ぶことです。 第2の目標は、アイデンティティの実体や困難に対する思考・反省能力の涵養です。「ドイツっぽい」ものの不確かさと同程度には「日本ならでは…」の正体はあやしいものかもしれません。当たり前を疑うことの価値とその面白さを、「ドイツ語圏」を通じて体験してみてください。 第3の目標は、表象文化や芸術の形式分析を通じて、抽象的な議論になれることです。文化現象を知的に理解し楽しめる能力は、わたしたちの人生を楽しく豊かに彩るだけではなく、21世紀の「グローバルな人」に求められる資質です。	△	◎		

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	ドイツ語圏の文化Ⅱ	ドイツ（昔のドイツ・東ドイツ・西ドイツ・統一後のドイツ）とオーストリア、スイスにおいて、ドイツ語で書かれた文学作品を読む。それによって、ドイツ語によって構築される文化についての考察を行なう。加えて、他の文化圏への参照を行う。 言語使用における理解の仕組みについて考え、インターカルチュラリティとインターテクスチュアリティという重要な概念を中心に置き、言語テクストを解析することを通して、異文化間の理解と誤解の実例としてテクストを分析する。 言語芸術としての文学作品の作品性も合わせて分析する。 ☆作品は、日本語翻訳として出版されているものを用いる。 ドイツ語の知識は必須ではない。 ☆他の文化圏で書かれているドイツ語以外の作品（日本語版）を対照として読む。	インターカルチュラリティとインターテクスチュアリティという重要な概念を理解する。 異文化間の理解と誤解の成立について考察を深める。	○	◎	△	
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化Ⅰ（思想）	[授業の目的]この授業では、17世紀を中心とするフランスの思想や文化をめぐり、いくつかの作品を概観します。この時代は、その後、グローバルに広がっていく近代社会の基本的な枠組みを ― よくも悪くも ― 西ヨーロッパにおいて形づくられた時代です。この時代についての知識を得て、考えを深めることは、受講者自身がさまざまな文化に関して抱いている価値観を、より奥行きのある、洗練されたものにしていくのに役立ちます。 [授業の概要] ※世界史以外を受験のさいに選んだ人を念頭に置きつつ、基礎知識を補う意味で、やや長めに「授業の概要」を以下に記述します。 ・デュビィ&マンドルー『フランス文化史』Ⅱによれば、17世紀前半のフランスは、ひとりの人間にたとえるなら「青春時代」のような状態にあった。ジャック・カルティエが「カナダ」と呼び、16世紀に探検した北アメリカの土地へは、17世紀に入ると交易やフランスからの入植が進められた。同じ頃、活版印刷と結びついて西ヨーロッパに広がった宗教改革は、伝統的なカトリック教国のフランスへも、プロテスタントの信仰を浸透させた。この浸透の結果もたらされた悲惨な宗教戦争を、ナントの勅令（1598年）により収拾したのはブルボン朝の創始者アンリ4世である。これに続く17世紀前半は、若々しさを連想させる経済社会の成長を基調としながらも、成長ゆえにカトリック教会を含む従来の秩序がゆらいだ時代でもあった。同時代の哲学者ルネ・デカルトは、迷信や思い込みに囚われた人間の意識のあり方を疑い、知識の確実な基礎を、数学や自然科学を支える合理精神のなかに、むしろ見いだした。同じく17世紀の哲学者パスカルの「人間は一本の葦に過ぎない、だがそれは考える葦である」という言葉は、環境に左右されやすく傷つきやすい弱さと、無限の宇宙をも分析しうる知性がもつ尊厳のあいだで、揺れ動く人間の姿をよく特徴づけている。 ・17世紀から18世紀前半にまたがるルイ14世の治世は、フランス史において「偉大な世紀」と呼ばれる。政治面においてはいわゆる絶対王政、文化面においてはいわゆる古典主義をつうじて、それぞれの領域における秩序の完成が目指された。ナントの勅令の廃止（1685年）によりカトリック教国としての純化を図り、宗教的寛容で知られた当時随一の商業大国ネーデルラント（オランダ）を屈服させようとしたルイ14世の力の基盤となっていたのは、フランスの人口の多さ（約2000万人）にくわえ、国内における強力な徴兵・徴税制度といった、リシュリューやマザラン、コルベールら、王権に仕えた実務家たちがつみあげた成果のうえにできた、集権的な世俗の国家であった。また、文化面における古典主義は、こうした国家から庇護を受け、ルイ14世という君主の栄光を讃美する（現代でいう）プロパガンダの面を確かにもっていたが、ヨーロッパの多くの宮廷が模倣するような影響力も実際に有していた。 ・イギリスやオランダとともに、いわゆる啓蒙思想の震源地であった二の時代のフランスの哲学者たちは、国境を越えた「文芸の共和国」のなかで活動しており、ルイ14世により確立された集権的な専制政治や、宗教における純化志向がもたらしがちな狂信に対して、しばしば批判的であった。	1. 各回のテクストの講読をつうじて、16世紀から17世紀にかけてのフランスにおける思想や文化を代表する作品に関する概要をつかむ。 2. 各回のテクストに登場する人物や作品から、そのなかに含まれている主題を、ステレオタイプに陥らずに、見いだす力を養う。 3. 権力と正義、そして宗教的狂信と暴力の関係について、受講する学生それぞれがみずからの考えを練り上げる。	○	◎	△	
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化Ⅱ（芸術）	近代フランスの絵画・写真・映画の歴史を概観し、芸術的・社会的な意義を学ぶ。	エポック・メイキンギな芸術家や流派、作品の名前などを覚え、その歴史的意義や社会背景を説明できるようになる。あわせて、鑑賞力を養う。	△	◎		
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化Ⅲ（歴史）	この授業ではフランス語圏の歴史を，フランスの植民地帝国という導きの糸に沿って，様々なテーマについて考えながら勉強していきます。現在の「フランス語圏」（pays / régions francophones）のほとんどがフランスの植民地帝国にその由来をたどることができますので，フランスの植民地帝国を勉強することにより世界各地に広がるフランス語圏の諸地域との関係性が明らかになるはずです。	この授業では，学生達はフランスの植民地帝国を導きの糸にフランス語圏の歴史に関する様々な側面を探求したり，論じたりします。授業終了時には，それらのトピックに関する様々な概念や問題点を深く理解し，以下 のことができるようになるでしょう。 ①フランスの植民地帝国について基本的知識を獲得し，説明できる。 ②植民地の概念を概ね理解できる。 ③世の中の動きを歴史的に考えるための視点を獲得する。 ④フランス語圏への留学に備える。）	△	◎	△	
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化Ⅳ（複言語・複文化社会）	世界5大陸に広がるフランス語圏（フランコフォニー）社会を「複言語・複文化社会」と捉えた上で、それぞれの社会において複数の言語文化が、どのように共存しているのか、またはどのように軋轢が解消されているのかを論じる。 具体的には、カリブ海域諸島、カナダのケベック州、北アフリカ・マグレブ、サハラ以南アフリカ、フランス語圏ヨーロッパなどにおける言語・社会状況を解説することで、フランス語圏社会の普遍性と差異を提示する。	(1)フランス語圏社会が複言語・複文化が共存する社会であることを具体的に知ること。 (2)言及する各社会において、言語・文化の多様性がどのようにして維持されているのかを知ること。 (3)言及する各社会において、「現地言語・文化」と「フランス語・文化」とが、どのような関係にあるのかを述べられるようになること。	△	◎	○	△
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	北米文化論（ケベック講座）	本授業は、ケベック州政府の寄付講座である。 本授業は、北米のフランス語圏の一つである「カナダのケベック州」をフィールドとして、オムニバス形式で、各分野の専門家や招聘作家・研究者が担当する授業である。言語・文化・歴史・社会・政治といった包括的な側面から、現代のケベック社会を学ぶことによって、一つの地域において複数の価値観（言語、文化、歴史、政治、経済、社会など）が共生する方法を解説・検討することを主たる目的とする。 なお、具体的な授業内容や講演者については、初回授業において改めて通知するため、以下の「授業計画」は予定であることをご理解いただきたい。	本授業の到達目標は、以下の通りである。 ①フランス語圏の一例として、ケベック州の社会文化的状況を概説できる。 ②多文化・多言語共生の一例として、ケベック州の社会文化的状況を概説できる。 ③一つのフィールドを複数の観点から理解するという方法を理解できる。	△	◎	○	△
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	スペイン語圏の文化Ⅰ	この授業では、スペインの歴史と、そこに生きる人々が織り成す社会、そして彼らが生み出した有形・無形の文化遺産について学ぶ。とりわけ、スペインを構成する諸地域および言語・民族の多様性と、それらの歴史的重層性への理解を得ることを目的とする。また、バルセロナ大学へのSAに参加する2年生は、バルセロナとカタルーニャへの理解と関心を、空間的にも時間的にも広い視野の中で深めてもらいたい。	スペインの歴史・文化・社会が放つ多彩な魅力と、そこに付随する諸問題への理解と関心を深め、各自の考えをプレゼンテーション、ディスカッション、学期末レポートにおいて精確に言語化することができるようになる。	◎	◎	○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	スペイン語圏の文化Ⅱ	この授業では、南北アメリカ大陸とカリブ海におけるスペイン語圏諸国・諸地域（アメリカ合衆国を含む）の、歴史・文化・社会の諸相について学ぶ。ラテンアメリカと総称されるこれらの地域は、極めて広大かつ多様性（あるいは不均衡）に満ちている。本授業では、特にインカ帝国が栄えたペルーの歴史や文化を中心的なテーマに据えながらも、個々の地域またはトピックへの理解と関心を深めることを通じて、可能な限りの全体像を掴むことを目的とする。	ラテンアメリカの歴史・文化・社会に関する基本的な理解を得る。 各自の問題関心を深め、それらをプレゼンテーションやレポートに言語化することができるようになる。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）	「バルセロナ」「ガウディ」「ダリ」「バルサ」「人間の塔」……。近年の独立問題をきっかけに、これらの言葉をスペインにではなく、むしろカタルーニャに関連づける人が増え始めているに違いありません。しかし、それはカタルーニャの魅力の氷山の一角に過ぎないのです。 その魅力はカタルーニャ語なしでは本格的に味わえないことは言うまでもなく、カタルーニャ文化・社会の大部分に触れることもできません。そこで、この授業はカタルーニャ語の基礎をしっかり身につけることはもとより、カタルーニャの世界に関心を持つ機会をつくることも目的とします。 最後に、この授業の続きとして「カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）」もあるので、関心を持った学生はぜひ、最後まで付き合ってください。なお、カタルーニャ語はその政治的かつ社会的な状況を知ることが特に欠かせない言語であるため、並行して「カタルーニャの文化Ⅲ（歴史・社会A）」および「カタルーニャの文化Ⅳ（歴史・社会B）」を履修することを強く推薦します。	① 基礎カタルーニャ語の能力を確実に習得すること（ヨーロッパ言語共通参照枠A1レベル相当）。 ② カタルーニャ語とカタルーニャの歴史・文化・社会に関心を持ち続けるモチベーションを見つけること。	◎	○	○	△
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）	「バルセロナ」、「ガウディ」、「ダリ」、「バルサ」、「人間の塔」……。近年の独立問題をきっかけに、これらの言葉をスペインにではなく、むしろカタルーニャに関連づける人が増え始めているに違いありません。しかし、それはカタルーニャの魅力の氷山の一角に過ぎないのです。 その魅力はカタルーニャ語なしでは本格的に味わえないことは言うまでもなく、カタルーニャ文化・社会の大部分に触れることもできません。そこで、この授業はカタルーニャ語の初中級をしっかり身につけることはもとより、カタルーニャの世界に関心を持つ機会をつくることも目的とします。 最後に、カタルーニャ語はその政治的かつ社会的な状況を知ることが特に欠かせない言語であるため、並行して「カタルーニャの文化Ⅲ（歴史・社会A）」および「カタルーニャの文化Ⅳ（歴史・社会B）」を履修することを強く推薦します。	① 初中級カタルーニャ語の能力を確実に習得すること（ヨーロッパ言語共通参照枠A2～B1レベル相当）。 ② カタルーニャ語とカタルーニャの歴史・文化・社会に関心を持ち続けるモチベーションを見つけること。	◎	○	○	△
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	カタルーニャの文化Ⅲ（歴史・社会A）	「バルセロナ」、「ガウディ」、「ダリ」、「バルサ」、「人間の塔」……。近年の独立問題をきっかけに、これらの言葉をスペインにではなく、むしろカタルーニャに関連づける人が増え始めているに違いありません。しかし、それはカタルーニャの魅力の氷山の一角に過ぎないのです。 この授業は、カタルーニャの歴史・文化・社会を知るための入門であると同時に、批判的な観点を培いつつ、世界の事情とのつながりを探求することも目的とします。スペインにありながらスペインではないという曖昧な状況を体現するカタルーニャには、例のない独特な文化のみならず、今日のグローバル化社会を理解するための矛盾＝ヒントも多く見出されます。 最後に、この授業の続きとして「カタルーニャの文化Ⅳ（歴史・社会B）」もあるので、関心を持った人はぜひ、最後まで付き合ってください。なお、カタルーニャの世界に本格的に触れるために、カタルーニャ語の知識も欠かせないので、並行して「カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）」および「カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）」を履修することを強く推薦します。	① カタルーニャの歴史・文化・社会に関する一般的な知識を身につけること。 ② カタルーニャと世界とのつながりを視野に入れた研究・論述・議論を行うこと。 ③ カタルーニャの歴史・文化・社会に関心を持ち続けるモチベーションを見つけること。	◎	◎	◎	△
専攻科目	言語文化科目群	ヨーロッパの文化	カタルーニャの文化Ⅳ（歴史・社会B）	「バルセロナ」、「ガウディ」、「ダリ」、「バルサ」、「人間の塔」……。近年の独立問題をきっかけに、これらの言葉をスペインにではなく、むしろカタルーニャに関連づける人が増え始めているに違いありません。しかし、それはカタルーニャの魅力の氷山の一角に過ぎないのです。 この授業は、カタルーニャの歴史・文化・社会を知るための入門であると同時に、批判的な観点を培いつつ、世界の事情とのつながりを探求することも目的とします。スペインにありながらスペインではないという曖昧な状況を体現するカタルーニャには、例のない独特な文化のみならず、今日のグローバル化社会を理解するための矛盾＝ヒントも多く見出されます。 最後に、カタルーニャの世界を本格的に触れるために、カタルーニャ語の知識も欠かせないので、並行して「カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）」および「カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）」を履修することを強く推薦します。	① カタルーニャの歴史・文化・社会に関する一般的な知識を身につけること。 ② カタルーニャと世界とのつながりを視野に入れた研究・論述・議論を行うこと。 ③ カタルーニャの歴史・文化・社会に関心を持ち続けるモチベーションを見つけること。	◎	◎	◎	△
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅰ（文化史）	近世イギリス演劇の事情について，基本的な情報を学んだ後，英語で書かれた論文を読むことで，各時代状況の中で，英米のみならず日本などの異文化圏においても，それらの演劇作品がどのように変化をして大衆に受け入れられてきたか，そしてその今日性について，他者とのディスカッションもおこなうことによって，学生一人一人が確認していく．	異文化間における交流，つまり異文化間コミュニケーションを図るためには，異なる文化的背景を持った者同士が，お互いの文化を理解し合うことが必須である．そして，異なる文化的背景を持つ他者の文化的生産物(cultural products)を受容，理解するためには，その異文化間に横たわる文化的境界を越境するもの，つまり架け橋のような要素の存在が重要である． 本授業では，時代を超えて英語圏を代表する作家であるWilliam Shakespeareの演劇を中心にした近世イギリス演劇を，「異文化圏間」，「異時代間」を縦横に巡る「越境性」，「今日性」をキーワードに，変化する時代，そして異文化圏，特に日本の文化と関連させて把握できるようになること，そして演劇のみならず，時代の変革期における大衆文化と社会を関連づけて考えられるようになることを目指す． さらには，英文で書かれた関連する論考を自分で読み解くこと，また特定のShakespeare作品の「越境性」「今日性」について受講生同士，そして外国人等の異なる文化的背景を持った人とのディスカッションを通して，自身による異文化の「越境」を体験することも目指す．	△	◎		
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅱ（思想史）	The Culture, Language, and Thought of the English-Speaking World is the product of many historical interactions between a variety of peoples with different ways of thinking and living in the world. To understand many aspects of the societies in the modern English-Speaking World, one must first recognize the historical forces that shaped them and brought them about.	The primary goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand: 1) how societies and cultures change in general and 2) how the cultures of the English-Speaking World developed their unique forms. Using the framework of cultural change, we will examine the formation of "Western" religious and political institutions that developed before 1500 CE in order to better appreciate the roots of "Western" social, political, and economic thought. Building on this foundation, the evolution of modern social systems and political-economic thought that occurred in the English-Speaking World after 1500 CE will be discussed.	◎	△	△	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅲ（現代事情）	英語圏世界とは、むろんイギリスや北米だけではなく、世界中に広がるイギリスの統治地域や植民地（そしてアメリカの領土なども）を多く含みこむ。したがって、英語圏世界について学ぶこととは、多くの場合、旧植民地地域について学ぶことでもある。そのためにもこの授業では、かつて「第三世界」あるいは「南」と呼ばれた旧植民地地域の歴史的な軌跡を概観して、「世界史」を異なる視座から学び、ひいては「英語圏」という枠組を再考することを目的とする。	・旧植民地地域について学び、現代の国際状況の理解につなげる。 ・旧植民地地域の歴史を振り返り、その主体性を重んじながら、西洋の視点から語られる「世界史」に対する別様の視点を身につける。またそこから、多様な文化的背景をもつ人々および国々の相互交流とその意義や課題について複数の角度から理解する。 ・東西の対立という観点から説明され、理解されがちな冷戦を、旧植民地地域の経験から再考する。	△	◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅳ（文学と社会A）	アメリカ文学をアメリカの社会や文化のさまざまな諸相と関連づけて考察する。各時代の文学作品に明示的に示されている問題意識を考察するだけでなく、なにげない描写から読み取れるアメリカの社会や時代の特異性を検討する。また、文学作品が、時には時代を超えながら、絵画、映画、音楽などとどのような影響を相互に及ぼしているのかを考えることで、アメリカ文学だけでなくアメリカ文化の奥深さを味わってもらいたい。	受講生は、アメリカ文学についての基礎的な知識を身につける。また、代表的な作品の内容を知るとともに、そこで描かれているアメリカの社会、文化、宗教、エスニシティ等の諸相を歴史的な視座から考察するための素地を身につける。	△	◎		
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅴ（文学と社会B）	18世紀から20世紀にかけての英語圏（イギリスとアイルランド）の文学作品を取り上げ、各作品の社会的・文化的・歴史的背景を考察しながら、文学を理解するうえでの知的視野を広げることをめざします。	それぞれの文学作品にうかがえる文体・人物造型・風景描写などを仔細に検討することで、時代の思想を読み解き、近代・現代における文学と社会のつながりについて理解を深めます。	◎	◎	○	△
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅵ（文学と社会C）	名誉革命後の18世紀イギリスで発展した小説という文学ジャンルは、進歩と科学の世紀でもあった19世紀、とりわけヴィクトリア時代(1837-1901)の間に作品も媒体も、そして読者も多様化し、影響力のある一大文化産業となる。この授業では、19世紀末のイギリス小説に焦点を当て、さまざまな不安――ダーウィニズムが生み出した先祖返りの不安、退化幻想、そして植民地から本国、野蛮から文明への逆侵略の恐怖――を描いた代表的な作品を読むことを通じて、イギリス文学・文化・歴史への理解を深める。	イギリス小説の代表的な作品を読み、テクスト（構造と細部）とその背景（文化・歴史）を理解する。 作品と作者の文学史における位置づけを理解する。 イギリス小説を原語でも読めるようにする。	△	◎		
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅶ（英語の構造）	本授業は，学生が現代英語の構造について，様々な面から考察するを目標にするものです．良きにつけ悪しきにつけ国際語になっている英語は，どのような言語であるのか，学生は，担当者とともに，授業を通じて考察していきます．	1．学生が英語の音声面，文法面等の構造について，知識を得られること． 2．学生が英語の構造についての研究の仕方について，ある程度の知識を得られること． 3．学生が英語という言語に関しての様々な問に対して，答えるべき道筋をつけられること． 4．併せて，学生が英語・英語文化圏についての知識を深めること． なお，上記の1，2で述べた知識ですが，ヤマとなる点は以下の通りです． a) 音声器官，発音記号． b) 音素の考え方（構造主義）． c) 言語の知識を構成する各部門の考え方． d) 記述上のさまざまな単位． e) 統語範疇（品詞論）． f) 直接構成素分析，句構造．	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅷ（英語の歴史）	英語の歴史は，ゲルマンの民族がブリテン島に侵入してから始まります．本授業では，担当者とともに，学生は，本来は大陸のゲルマンの部族の言語であった言語がブリテン島に入り英語になってから，どのような変化を遂げて，21世紀の今のような国際的な言語となっていったか学んでいきます．	1．学生が英語の歴史について，ひと通りの知識を得ること． 2．学生が英語の歴史に興味を持ち，現代英語の様々な事象について，歴史的な説明を試みること． 3．学生が言語の歴史研究について，その大まかな方法論を知ること． 4．学生が英語の運用力をつけること．	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	Structure of English	The aim of this course is to consider structural aspects of the English language, which has become the de facto 'global' language. Towards the end of this course, students will be able to attain the following goals indicated below.	1. To get a general idea about how English sounds and grammatical phenomena are described. 2. To obtain a certain level of knowledge about how various structural aspects of modern English SHOULD be described. 3. To obtain enough knowledge about modern English so as to answer various questions about the alleged 'mysteries' of the English language. 4. To study English in its general sense. (You see, you all finished your SA programmes, so you should keep that level of English until graduation.) The following is the list of important topics (among others) to be covered in this course: a) articulatory organs and phonetic symbols, b) the notion of phoneme (introduction to structural linguistics), c) modular approach to linguistics, d) various units in linguistic description, e) syntactic categories (parts of speech), f) intermediate constituency, phrase structural analysis	◎	◎	○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化科目群	英語圏の文化	History of English	Towards the end of this course, students will be able: 1. to study the history of the English language, which, good or bad, has become an 'international language' in our modern world; and 2. to develop a general interest in the language itself through doing a lot of reading.	1. To get a general idea how the English language has evolved, 2. To try to explain various apparent 'mysteries' of English in historical terms, 3. To begin to develop a general theory of linguistic change, 4. To study English in its general sense. (You see, you must keep that level of English acquired through your SA experience!)	◎	◎	○	
専攻科目	国際社会科目群	国際社会研究の方法	世界とつながる地域の歴史と文化	この授業は、2012年度から夏休みに長野県南部の飯田・下伊那地域で実施している「SJ国内研修」（SJ＝Study Japan）に参加する留学生・ボランティア補助員および希望する一般学生を主対象に、その事前学習用として開講されるものである（留学生必修）。 「SJ国内研修」とは、一般学生のSAに相当するもので、地方の中山間地域で見聞・交流・発表等の諸活動を経験することで、留学生にとってのSAとも言えるこの日本を、東京からの発想とは別に、地方の視点でも考えうる目を養うことを趣旨としている。 したがって、この授業の目標も、飯田・下伊那地域の歴史・社会・文化・民俗・自然などについて、一通りの前提知識を身につけることで、8泊9日程度の「SJ国内研修」を有意義に送れるようにすることにある。国際文化学部の研修であることに鑑み、とりわけこの地域における国際化や異民族との関係、および文化に重点を置きながらみていく。	授業の進展につれ、南信州の中山間地域である飯田・下伊那にも、東京とはまた異なる歴史・文化・自然があり、固有の国際関係があることが理解できるであろう。最終的には、「SJ国内研修」に際して探求すべき自分なりのテーマをみつけ、夏休み中の自己学習を経て、研修本番につなげられるようにすることが目標である。 「SJ国内研修」に参加せず、単なる一授業として受講することも可能だが、そうした受講者にとっては、飯田・下伊那を例に、日本のなかに存在する多様性や多文化を考える視点を得ることが到達目標となる。そこで得られた視点やアプローチは、日本の他地域を考える際にも有効に機能するであろう。	△	◎	◎	○
専攻科目	国際社会科目群	国際社会研究の方法	実践社会調査法	質的社会調査の実践と量的社会調査のリテラシーを学ぶことで、卒業研究などで活かせるような研究方法を身に着けることを目指す。なお、量的社会調査についてはリテラシーを学ぶに留め実践は行わない。	(1)統計的な社会調査データの読み取りができる。 (2)質的調査（観察、ドキュメント分析、ライフストーリー分析など）を実践できる。 (3)卒業研究などに必要な、問いの構想、妥当な調査、収集したデータを適切に使った短い論文執筆ができるようになる。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会科目群	国際協力	実践国際協力	大学教育で「実践」から学ぶことには2つの意義があると考える。1つは体系立った学習の応用として、もう1つは新たに学習すべき領域を見つけるためである。この授業では後者を主たる目的とする。テーマは「国際開発協力」を中心的に取り上げる。国際開発協力の実践例を通して、国際社会の理解につながる思いもよらぬ学問分野の大切さを発見し、更なる学習と探究の端緒となるようにする。	(1)国際開発協力の理解に必要な概念や用語を理解し説明できるようになる。 (2)国際開発協力の実践課題を抽象化し他に応用できるようになる。 (3)実践的な学習におけるグループ討議の意義を理解する。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会科目群	国際協力	国際関係研究Ⅰ（旧：国際関係研究Ⅰ（アクターに着目した理論の捉え方））	本授業ではアクター（行為の主体）に着目して「国際関係」を学ぶ。「国際関係」を国家の関係のみで語ることは困難であり、特にNGOや企業などの民間アクターの存在は重要である。本授業ではそのために必要な理論を習得するとともに、それを通して国際社会の諸問題を多角的に分析する力を養う。	(1)授業で扱う非国家アクターが「国際関係」にどのような影響を及ぼしているかを説明できる。 (2)「国際関係」に関わる事件や問題が生じたとき、理論的に現象を説明することができる。 (3)関連する文献の趣旨を正しく読み取ることができる。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会科目群	国際協力	途上国経済論	日本の経済は、様々な資源の供給元や市場として世界各国との相互依存を強めている。この講義は、世界人口の半数以上が暮らす、開発途上国と呼ばれる国や地域の経済と社会について、固有の歴史／文化的背景も含め日本とのかかわりを念頭におきながら基礎的な知識の習得をめざす。	本講義においては、ア）途上国経済の分析枠組み、特徴、イ）主要地域や主要国の経済・社会の特徴について学び、ウ）日本社会や経済の世界における位置づけをよりよく理解し、エ）将来社会に出た際に諸外国の人々と基礎的な知識に基づいた意味あるコミュニケーションができるようになることを目標とする。		◎	◎	
専攻科目	国際社会科目群	多文化社会	宗教社会論Ⅰ（仏教思想）	本講義は、近現代日本の仏教思想への理解を深めることを目的とします。 仏教は、日本においても長い発展の歴史を持つ宗教の一つです。「家の宗教」という言葉に代表されるように、日本に住む多くの人が、自覚的に信仰していない宗教なのかもしれません。しかし、葬式やお盆などに代表されるように、仏教は、今なお日本の生活に深く根ざしていると言えるでしょう。 日本の生活に根ざしながらも、近現代日本の仏教は、教義、儀礼や実践、教団組織などを近代化させながら発展しました。こうした展開は、仏教が「寺院から出て行く」過程でもあったと言われることもあります。仏教が「寺院から出ていく」歴史は、多くの人はあまり馴染みがないかもしれません。本講義では、仏教が「寺院から出ていく過程」を学ぶことで、近現代日本の仏教思想の発展の歴史に対する理解を深めていきます。それを通じて、今日の仏教のあり方を考えていくヒントを提供します。	近現代日本の仏教思想について、歴史的事例をもとに論じることができる。 また近現代日本の仏教思想の展開を学ぶことにより、自らの「仏教」イメージを相対化するとともに、今日の仏教のあり方について認識を深めることができる。		◎	○	
専攻科目	国際社会科目群	多文化社会	宗教社会論Ⅱ（旧：宗教社会論Ⅱ（キリスト教と社会運動））	キリスト教は様々な社会思想と結びつきながら、近現代社会における諸問題に対する改革運動を、世界各地で展開してきました。この授業を通じて、学生は19世紀以降におけるキリスト教を基盤とする社会運動が、どのように近現代社会における諸問題（労働問題・人種差別・貧困・ジェンダー問題・植民地主義など）を捉えたのか、また新たな社会思想（進化論、社会主義、フェミニズム、など）とどのように関わりをもっていったのかを、社会思想史・社会運動史の立場から分析し議論していきます。	1. 近現代のキリスト教に基づく社会運動を考える上で、重要な基本概念や理論について理解できるようになる。 2. 宗教と社会運動の関係を、社会思想や歴史意識の視点から分析できるようになる。 3. キリスト教に基づく社会運動に関する簡単な史料分析を行えるようになる。		◎	○	
専攻科目	国際社会科目群	多文化社会	宗教社会論Ⅲ	イスラーム学に初めて触れる学生が、イスラームの教義と思想およびムスリムの歴史、社会、文化に関する基本的な知識を得るとともに、他の宗教や宗派・教派といった「異文化」との関係性について考える。	イスラームとムスリムへの理解と関心を深めるとともに問文化的な視点を養い、各自の考えをリアクションペーパーと学期末レポートにおいて精確に言語化することができるようになる。		○	○	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	国際社会科目群	多文化社会	間文化性研究翻訳論	翻訳が自然言語間の転換作業であることどまらず、人間の意志表出のすべてを可能とする基本であることを学ぶ。 実例分析としては、文学作品の自然言語間における翻訳テクストを取り上げ、翻訳の基本概念を把握する。 サン・テグジュペリ:『星の王子さま』を使用する。できる限り多くの言語の翻訳を参照する。 星の王子さまは、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、中国語、朝鮮語、そのどれにおいても、私たちが子どもの時に読んだのと全く同じイメージなのでしょうか。小生意気な小さい大人なのか、めめめそした幼児なのか、元気一杯のわんぱくなのか、テクストに忠実に分析します。 日本語訳が新しく数冊出版されました。その比較検討も行ないます。	翻訳についての基本的学術用語を理解する。 翻訳の原理と可能性・限界を知る。 私たちが日常的に行っている他言語テクストの翻訳について、学術的概念をあてはめて理解する。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会科目群	多文化社会	言葉と社会	「言葉と社会」「多言語社会」「言語政策」をテーマに、言語と社会がどのように関わっているのか、社会において言語はどのような役割を果たしているのかなどについて考えていきます。 「言語と方言」「二言語併存」などの基本的な概念について解説した上で、歴史的な経緯でいくつもの言語が用いられる社会、移民が多く住む社会での言語問題について多く取り上げます。	・社会的なコンテクストで言語がどのような役割を担っているかを理解する。 ・それぞれの社会において言語の持つ役割や重要性が異なっていることを理解する。 ・言語に対する価値観は人によって異なることを理解し、相対化して考えるべきことを理解する。	◎	◎	◎	
専攻科目	国際社会科目群	多文化社会	多文化社会と人間	本講義では、かつて多民族・多文化社会の指針として位置づけられた「多文化主義」(multiculturalism)について批判的に検討し、その後に提起された「間文化主義」や「多自然主義」などの新たな知見を吟味することを目的とする。文化の多様性と価値の平等を認め、互いのアイデンティティの尊重を唱える多文化主義は、民主主義国家における統合政策の精神であったが、西洋社会では他者への不寛容と排斥が蔓延し、多文化主義は失敗したと認識された。多文化主義はなぜ行き詰まったのか。多文化主義による社会統合を後退させた要因は何だったのか。そして多文化主義を乗り越えるために、今日どのような考え方が提起されているのか。授業では、上記の観点をめぐって議論しながら、日本版多文化主義でもある「多文化共生」についても、あわせて考察する。	多文化主義の盛衰をめぐる歴史的・社会的な背景を踏まえながら、まずは、①多文化主義とそれに関連する諸概念との関係性を理解し、つぎに②多民族・多文化社会において多文化主義が失速するに至ったメカニズムと要因を多角的に捉えられるようになることが求められる。そのうえで、③ポスト多文化主義の思想的潮流についての知見を習得することをめざす。		◎	◎	
専攻科目	国際社会科目群	多文化社会	国際関係研究Ⅳ（旧：国際関係研究Ⅶ）	人間は、誕生から死ぬまでの間、つねに他者との関係を持ち続ける。あるいは、誕生前の生殖過程および死後の世界においても、人間は人びとを結ぶ関係の網の目に生きているといっても過言ではない。本授業では、とくに家族と結婚をキーワードとして、このような人と人をつなぎ合わせる社会関係およびそれを支える制度や組織について文化人類学的に考察する。	・文化人類学、とくに家族と結婚に関する基本的な理論や概念を習得する。 ・ものごとを幅広い視野から捉えることによって得られる他者理解の洞察力に身に付ける。 ・世界の多様な人間の在り方を学び、結婚・親子・家族とは何かについて相対的な視点を獲得する。		◎	○	
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	国際関係研究Ⅱ（旧：国際関係研究Ⅱ（メコン流域国の開発と環境（社会と自然））	本授業では東南アジア半島部のメコン地域／メコン河流域国／大メコン圏という「地域」に着目して「国際関係」を学ぶ。「開発」をテーマにし、特にその社会的・環境的側面を多角的に見る視点を養う。	(1)「地域研究」の視点からメコン河流域の自然環境やそれに依拠する社会について学び、日本とは異なる生活様式や社会への理解を深める。 (2)メコン河流域の環境・社会問題と日本との関係について学ぶ。 (3)反転学習を通して、「地域」を分析するための多角的な視点を身につける。	◎	◎	◎	○
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	人の移動と国際関係Ⅰ（旧：人の移動と国際関係Ⅰ（華僑・華人社会））	「人の移動」という観点から19、20世紀のアジアの歴史を見ると、中国系移民の動きを筆頭に挙げることができる。中国大陸から移住し、現地に定着した華僑（中国国籍保有者）、華人（現地国籍保有者）を合わせると2千万人から3千万人といるといわれており、これら中国系移民が現地社会に与えた影響は計り知れないものがある。この授業では、華僑の移住と定着、ネットワークとアソシエーション、生活・文化などについて基本的知識を得るとともに、「内なる異文化」である日本華僑の歴史と社会の特徴、人々の日常生活、日本社会との関係などを理解し、等身大の日本華僑像を持てるようにする。	中国系移民に関する基本的な知識を得るとともに、日本における多文化共生について考える力を養う。		◎	○	
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	人の移動と国際関係Ⅱ（旧：人の移動と国際関係Ⅱ（朝鮮民族のディアスポラ））	朝鮮民族のディアスポラ(離散)について考察する。 私たちの暮らす日本社会には、「在日韓国人」「在日朝鮮人」「在日コリアン」などと呼ばれる韓国・朝鮮系の人々が大勢住んでいるが、同様の現象は中国・旧ソ連・アメリカなど、世界各地で見られる。これらの人々が朝鮮半島を離れ、各地に移住した歴史やその後の変化、とくに現地社会での他民族との衝突や共生の営みを、各種の研究成果や教員自身の見聞をもとに、ともに考える。 朝鮮民族の移動と定着という個別のテーマを探求することを通して、移民過程や移住地での多文化共生・文化の変容という、世界に普遍的にみられる現象への理解につながるようにする。	・各地に暮らす朝鮮民族について、その形成の歴史や現状の概略を理解する。 ・それらをもとに、朝鮮民族のディアスポラ(離散)全体について考察する。 ・朝鮮民族の事例を普遍化し、移民や多民族共生全般について考える契機をつかむ。 ・とりわけ私たちの住む日本における移民や多民族共生について、具体性を伴いつつ考えられるようにする。	△	◎	○	△
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	人の移動と国際関係Ⅲ（旧：人の移動と国際関係Ⅲ（アジア・太平洋））	近代以降の国際関係は、地域・国家における政治・経済・社会の変動から、人・モノ・情報の交換範囲を拡大し、国境を超えた移動・相互関係を増大させてきた。植民地支配や労働市場の拡大、戦争などの歴史的経緯や政策によって、個人や集団同士は「他者」への認識および「他者」との関係を構築し、現在にも様々な影響を与えている。本講義では、東アジア国際関係における人々の移動の歴史やそれを引き起こした要因・政策を押さえた上で、現在の日本・アジアの現状を検討する。また、移動の実態に即して考えるために、近現代アジアにおける女性・家族の移動の特徴を考え、グローバル化と同時に進行する多文化化の中で、「他者」の理解や歴史・文化の対話による衝突と交流の可能性の理解を「自らの関わり」として深められるような議論を行いたい。今後、現実に「他者」との摩擦に直面した場合にも、歴史認識に鍛えられた批判精神を保てる能力を養うことを目的とする。	1)近現代国際関係におけるヒトの移動の背景・要因についての理論を確認し、2)それらが近現代東アジアにおいてどのような歴史・政策を辿ってきたのか、具体的に検討する。更に、3)実態的な移動がどのように生じ、地域や移動するヒトに具現化しているのか「女性の移動」の特徴を捉え、4)現在そして今後の日本の政策の課題を検討する。		◎	◎	

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP-Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP-Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP-Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	国際関係研究Ⅲ（旧：国際関係研究Ⅵ）	サハラ以南アフリカについて、主に歴史、社会、政治、国際関係というカテゴリーから学び、アフリカ研究の導入となる知識を身につける。それによって、変わりゆくアフリカ地域の「いま」を考え、アフリカを多面的に理解することを目指す。	・アフリカを学ぶための基礎知識を身につける。 ・アフリカの多様性を理解し、アフリカ研究への関心を高める。 ・世界史のなかのアフリカ地域をとらえ直す。国際関係におけるアフリカの位置について考える。 ・アフリカについて学び、アフリカから「世界」を見ることで、欧米中心的な視点や思考を乗り越える。	○	◎	◎	
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	持続可能な社会	SDGsの実現には、持続可能な社会づくりが重要である。 SDGsとは何かをカードゲームや対話を通して体感しながら、持続可能な社会づくりを構成する「6つの視点」を軸にして、持続可能な社会づくりに関わる課題を見出し、その課題解決に向けて考察する。	1. サステナブルとは何かを理解し、説明できる。 2. SDGsとは何か理解し、説明できる。 3. グループワークや対話を通して、批判的に考える力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する力、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度を身につける。 4. 自ら課題を見出し、その解決に向けての対策を考案することができるようになる。	○	◎	◎	◎
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	地域協力・統合	「ヨーロッパとは何か」という問いに、自分なりの答えを言えるようになるのがこの授業の目的です。授業を紹介するショート動画をご覧ください https://youtube.com/shorts/iaK97j-Q6ss 学内には他にもヨーロッパ関連の科目がありますが、これらの授業と比較した時の、本授業「地域協力・統合」の特色は、高校までの世界史の知識を確かめながら、思想史や文化史に軸足をおきつつ、これからの国際社会で活躍する人材が身に付けておくべき基礎教養として、「ヨーロッパとは何か」について学ぶ点にあります。過去と現在を往復しながら、とくにヨーロッパと、その外部とされるものの境界（ボーダー）に焦点をあてつつ、認識をほりさげていきます。	①「ヨーロッパ」の地理的広がりについて、みずからの考えを述べることができる。 ②古代ギリシア、ヘレニズム、古代ローマの文化的・政治的・哲学的遺産と「ヨーロッパ」を関連付けて（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ③西ローマ帝国崩壊前後以降、10世紀にいたるゲルマン人、ノルマン人、スラブ人の民族大移動と「ヨーロッパ」の形成を、各国史との関係で（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ④カトリシズムを軸として形成される中世の西ヨーロッパと、正教を軸として形成される東ヨーロッパや、イスラームの拡大を関係づけつつ（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ⑤ルネサンス期を特徴づけるユマニスムの人間論上の意義、大航海時代における非ヨーロッパ地域への影響、宗教改革がもたらした信仰と政治の関係性について、（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ⑥中央集権化やヨーロッパ外における植民地をめぐる争い、「文芸の共和国」の出現など、一連の政治的文化的な変化を背景としつつ、商業の発展をつうじて発生した「ヨーロッパ中心主義」的な意識に関し、肯定・否定の両面から論じることができる。 ⑦イギリス、アメリカ、フランスや他のヨーロッパ諸国にみられる市民的権利にもとづく思想・制度の発達について、（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会科目群	国際関係と地域	Approaches to Transnational History	This course is designed for students who are interested in the history of cultural exchanges from transnational perspectives. By exploring various kinds of cross cultural encounters facilitated by the movement of people, ideas, goods, services, capital, and technology, students will be introduced to the basic concepts and methods of transnational history.	By the end of this course, students will be able to ① Understand various approaches to transnational history and how these approaches are connected to the issues of colonialism, the development of capitalism, and the formation and spread of the nation-state. ② Critically read and analyze both secondary scholarship and primary historical documents on transnational history. ③ Write a short critical essay analyzing cross-cultural encounters and movements across borders.	○	○	○	○
専攻科目	インターンシップ		インターンシップ事前学習	本授業の目的は、学生が「国際文化学部に親和性のある企業・団体の第一人者によるプロフェッショナルな仕事」を理解し、今後の就職活動などに活かすことにあります。複数の外部講師が登壇する「オムニバス授業」です。 本学部学生の中は、卒業後どのような仕事に就くのか、就けるのかという点について不安に思っている学生もいるかもしれません。本授業を通じて、学生は幾つかの業界は国際文化学部との親和性が大きいものであることを理解するでしょう。 またそうした業界の第一線で働く経験豊富な講師による授業を見聞きすることで、学生はそれぞれの業界・企業・団体の仕事の内容と将来の展望を知ることができます。	1）国際文化学部に関連する企業・団体の第一線で活躍される外部講師らによる講義を通じて、学生は各職種の特徴・問題などを学ぶことができる。 2）実社会で生きるとはどういうことかを、最新のデータや体験談を交えて学ぶことができる。 3）国際文化学部と親和性の高い企業・機関に関する生の情報を収集することで、「インターンシップ」という就業体験や就職活動などの準備にも活かすことができる。		○	○	○
専攻科目	情報文化科目群 表象文化科目群 言語文化科目群 国際社会科目群		情報文化演習 表象文化演習 言語文化演習 国際社会演習	演習とは、それまでの学習である程度の知識を身に付けた学生が、少人数指導の環境の下、みずからの専門性をさらに深める場である。	(1) 語学力やICTのリテラシーを用い、演習での活動に関係する先行研究を検索 し、文献リストを作成することができる。 (2) 文章の執筆や作品の制作にあたり、剽窃の禁止や著作権の尊重など基本的 な学術ルールがあることを理解し、実践することができる。 (3) 受験勉強や資格試験のための勉強と、先行研究を踏まえた自律的な研究の 違いについて、みずからの考えを述べることができる。	◎	◎	◎	◎
			アジアの伝統芸能	中国には「戯曲」と総称される300種あまりの伝統歌劇と「曲藝」と総称される400種ほどの語り物がある。こうした芸能を通じて、中国庶民の文芸世界を垣間見ようというのが本講義の目的である。中国の庶民が、どのような物語に笑い、怒り、涙したのかを、彼らの一番身近にあったメディアを通じて追体験していく。	この授業を通じて、中国の伝統芸能の全体像とその代表的作品、演出・技法などを体系的に学び、そうした伝統文化が新たな文化の創出にどのような役割を果たすかを理解することができる。		◎	◎	○

国際文化学部のディプロマ・ポリシー（DP）		法政大学のDPとの連関（リンク）
1	言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。	法政DP- Ⅱ／ Ⅵ
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ/Ⅵ
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。	法政DP- Ⅰ/Ⅳ/Ⅴ/Ⅵ/Ⅶ
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。	法政DP- Ⅰ/Ⅵ/Ⅶ

分類			科目名	授業の概要と目的（何を学ぶか）	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	卒業研究		卒業研究	卒業研究とは、学部での学びの集大成であり、学術的に意味のあるテーマをみずから設定し、自律的な研究を展開しうることを証明するための場である。	(1)論文の執筆や作品の制作に際して扱う主題について、先行研究を読み込み、文章に要約することができる。 (2)学術的に意味のある研究テーマとは何かという問題について、みずからの考えを述べることができる。 (3)みずから設定した研究テーマが、既に身に付けた語学力やICTのリテラシーで達成可能かという問題について分析する力を持っている。	◎	◎	◎	◎
専攻科目	FS		海外フィールドスクール	2024年度春学期・夏季集中特別授業期間に国際文化学部・他学部公開科目「海外フィールドスクール・表象文化コース」が実施されます。この授業は例年東南アジア各国で実施されていますが、緊急事態宣言下の2021年度、2022年度には、オンラインで開講しました。 今年度の授業構成は、日本で受講するオンライン（オンデマンド）授業とフィリピン・マニラに渡航してのフィールドワークを組み合わせたものになります。 この授業では、フィリピンの文化と芸術をテーマとして生活や文化背景の違う人々との共同作業を通じて、多角的な見方、考え方による双方向の文化理解やコミュニケーションについて体験的に学びます。今年度のテーマは「インターベンション・アート」です。マニラの街や文化施設を巡りながら、都市に介入するアートワークの方法を探ります。 東南アジア、フィリピンの環境問題や社会問題と美術や演劇、映画などの文化活動を関連させるワークショップを中心とする講座となっています。東南アジアの文化に関心のある皆様はぜひご参加ください。担当教員は稲垣立男です。 オンデマンド授業 ・7月以降に順次公開 マニラへの渡航日程 ・8月4日（日）−8月8日（木） ・8月4日（日）東京ーマニラ ・8月8日（木）マニラー東京	フィリピン在住の研究者、ジャーナリスト、NPO運営者、アートキュレーター、アーティストらによる講義やワークショップ、フィリピンをテーマとしたマニラでのフィールドワークを通じてフィリピンの文化や人々の暮らし、演劇や現代アートなどの芸術表現や文化政策への理解を深めることを目標とします。	○	◎	◎	◎